

CA ARCserve® Backup

Client Agent ユーザ ガイド

r16



このドキュメント(組み込みヘルプ システムおよび電子的に配布される資料を含む、以下「本ドキュメント」)は、お客様への情報提供のみを目的としたもので、日本 CA 株式会社(以下「CA」)により随時、変更または撤回されることがあります。

CA の事前の書面による承諾を受けずに本ドキュメントの全部または一部を複製、譲渡、開示、変更、複本することはできません。本ドキュメントは、CA が知的財産権を有する機密情報です。ユーザは本ドキュメントを開示したり、(i) 本ドキュメントが関係する CA ソフトウェアの使用について CA とユーザとの間で別途締結される契約または (ii) CA とユーザとの間で別途締結される機密保持契約により許可された目的以外に、本ドキュメントを使用することはできません。

上記にかかわらず、本ドキュメントで言及されている CA ソフトウェア製品のライセンスを受けたユーザは、社内でユーザおよび従業員が使用する場合に限り、当該ソフトウェアに関連する本ドキュメントのコピーを妥当な部数だけ作成できます。ただし CA のすべての著作権表示およびその説明を当該複製に添付することを条件とします。

本ドキュメントを印刷するまたはコピーを作成する上記の権利は、当該ソフトウェアのライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、上記のライセンスが終了した場合には、お客様は本ドキュメントの全部または一部と、それらを複製したコピーのすべてを破棄したことを、CA に文書で証明する責任を負います。

準拠法により認められる限り、CA は本ドキュメントを現状有姿のまま提供し、商品性、特定の使用目的に対する適合性、他者の権利に対して侵害のないことについて、黙示の保証も含めいかなる保証もしません。また、本ドキュメントの使用に起因して、逸失利益、投資損失、業務の中断、営業権の喪失、情報の喪失等、いかなる損害(直接損害か間接損害かを問いません)が発生しても、CA はお客様または第三者に対し責任を負いません。CA がかかる損害の発生の可能性について事前に明示に通告されていた場合も同様とします。

本ドキュメントで参照されているすべてのソフトウェア製品の使用には、該当するライセンス契約が適用され、当該ライセンス契約はこの通知の条件によっていかなる変更も行われません。

本ドキュメントの制作者は CA です。

「制限された権利」のもとでの提供:アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212、52.227-14 及び 52.227-19(c)(1)及び(2)、ならびに DFARS Section 252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

Copyright © 2011 CA. All rights reserved. 本書に記載された全ての製品名、サービス名、商号およびロゴは各社のそれぞれの商標またはサービスマークです。

CA Technologies 製品リファレンス

このマニュアルが参照している CA Technologies の製品は以下のとおりです。

- BrightStor® Enterprise Backup
- CA Antivirus
- CA ARCserve® Assured Recovery™
- CA ARCserve® Backup Agent for Advantage™ Ingres®
- CA ARCserve® Backup Agent for Novell Open Enterprise Server for Linux
- CA ARCserve® Backup Agent for Open Files on Windows
- CA ARCserve® Backup Client Agent for FreeBSD
- CA ARCserve® Backup Client Agent for Linux
- CA ARCserve® Backup Client Agent for Mainframe Linux
- CA ARCserve® Backup Client Agent for UNIX
- CA ARCserve® Backup Client Agent for Windows
- CA ARCserve® Backup Enterprise Option for AS/400
- CA ARCserve® Backup Enterprise Option for Open VMS
- CA ARCserve® Backup for Linux Enterprise Option for SAP R/3 for Oracle
- CA ARCserve® Backup for Microsoft Windows Essential Business Server
- CA ARCserve® Backup for UNIX Enterprise Option for SAP R/3 for Oracle
- CA ARCserve® Backup for Windows
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for IBM Informix
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Lotus Domino
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Microsoft Exchange Server
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Microsoft SharePoint Server
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Microsoft SQL Server
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Oracle
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Sybase
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Virtual Machines

- CA ARCserve® Backup for Windows Disaster Recovery Option
- CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Module
- CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Option for IBM 3494
- CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Option for SAP R/3 for Oracle
- CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Option for StorageTek ACSLS
- CA ARCserve® Backup for Windows Image Option
- CA ARCserve® Backup for Windows Microsoft Volume Shadow Copy Service
- CA ARCserve® Backup for Windows NDMP NAS Option
- CA ARCserve® Backup for Windows Storage Area Network (SAN) Option
- CA ARCserve® Backup for Windows Tape Library Option
- CA ARCserve® Backup Patch Manager
- CA ARCserve® Backup UNIX/Linux Data Mover
- CA ARCserve® Central Host-Based VM Backup
- CA ARCserve® Central Protection Manager
- CA ARCserve® Central Reporting
- CA ARCserve® Central Virtual Standby
- CA ARCserve® D2D
- CA ARCserve® D2D On Demand
- CA ARCserve® High Availability
- CA ARCserve® Replication
- CA VM:Tape for z/VM
- CA 1® Tape Management
- Common Services™
- eTrust® Firewall
- Unicenter® Network and Systems Management
- Unicenter® Software Delivery
- Unicenter® VM:Operator®

CA への連絡先

テクニカル サポートの詳細については、弊社テクニカル サポートの **Web** サイト (<http://www.ca.com/jp/support/>) をご覧ください。

マニュアルの変更点

本マニュアルでは、前回のリリース以降に、以下の点を更新しています。

- CA Technologies へのブランド変更
- CA ARCserve Backup のこのリリースには、NetWare プラットフォームに対するクライアントエージェント サポートは含まれていません。NetWare プラットフォームを参照するトピックはすべて更新または削除されました。
- 製品およびドキュメント自体の利便性と理解の向上に役立つことを目的として、ユーザのフィードバック、拡張機能、修正、その他小規模な変更を反映するために更新されました。

目次

第 1 章: クライアント エージェントの紹介	11
概要.....	11
クライアント エージェントを使用する利点	12
サポートされているクライアントシステム	13
Backup Agent 管理へのアクセス	15
第 2 章: クライアント エージェントのインストール	17
インストールに関する考慮事項	17
Client Agent for Windows	17
Enterprise Option for OpenVMS	18
UNIX、Linux、および Mainframe Linux プラットフォームにインストールされたクライアント エージェント向けの通信要件.....	18
クライアント エージェントのインストール	19
一般的なエージェントの自動インストール	19
Common Agent と Client Agent 用のインストール ディレクトリ	20
第 3 章: クライアント エージェントの追加と設定	21
Client Agents の追加.....	21
エージェントおよびノードの追加、インポート、エクスポートの方法	21
クライアント エージェントの手動追加	23
Windows Client Agent の設定	25
Windows を環境設定する際の注意事項	26
セキュリティ設定のオプション	26
バックアップの優先度およびリストア/比較の優先度オプション	27
複数同時のリストアまたは比較.....	27
バックアップおよびリストア実行オプション.....	28
Backup Agent 管理による Windows パラメータの設定.....	28
パスワード セキュリティの設定	32
選択した環境設定の表示	32
raw バックアップおよびリストアの有効化	34
Windows ネットワーク通信の環境設定	34

ワークステーション パスワードの設定	37
Windows アクセスコントロールリストの作成	38
ウイルス スキャンを実行する	40
カスタマイズ可能なローカル オプション	41
Client Agent for Windows がバックアップからデータベース アプリケーション ファイルを除外 する仕組み	41
UNIX および Linux Client Agent の環境設定	42
UNIX および Linux の環境設定の際に考慮する事項	42
UNIX および Linux クライアント エージェントのコントロール ファイル	43
UNIX および Linux の Common Agent 環境設定ファイル	44
UNIX のスナップショットおよび Direct I/O のサポート	54
UNIX および Linux のアクセスコントロールリスト	60
AS/400 Enterprise Option の設定	63
開始設定	64
実行環境設定	64
停止設定	65
OpenVMS Enterprise Option の設定	65
ポート アドレスの設定	66
TCP/IP スタックの最適化	66
OpenVMS Enterprise Option のトレースレベル	66
第 4 章: クライアント エージェントの使用法	69
Runtime Statistics	69
Client Agent for Windows の Runtime Statistics の表示	70
アクティビティ ログ	70
Windows Server でのアクティビティ ログの表示	70
UNIX、Linux、または Mac OS X クライアント エージェント マシンでのアクティビティ ログの表 示	71
AS/400 Enterprise Option を実行しているコンピュータのアクティビティ ログ	71
OpenVMS Enterprise Option を実行しているコンピュータのアクティビティ ログ	72
Client Agent ログ ファイルの削除	72
Windows ネットワーク サーバのデータのバックアップ	73
Client Agent の開始と停止の手順	73
Windows の開始と停止の要件	74
UNIX および Linux クライアント エージェントの開始と停止	75
Enterprise Option for AS/400 の開始と停止の要件	76

Enterprise Option for OpenVMS の開始と停止の要件.....	77
用語集	79
索引	81

第 1 章: クライアント エージェントの紹介

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[概要 \(P. 11\)](#)

[クライアント エージェントを使用する利点 \(P. 12\)](#)

[サポートされているクライアント システム \(P. 13\)](#)

[Backup Agent 管理へのアクセス \(P. 15\)](#)

概要

CA ARCserve Backup は、アプリケーション、データベース、分散サーバおよびファイル システム向けの包括的なストレージ ソリューションです。データベース、ビジネスクリティカルなアプリケーション、およびネットワーク クライアントにバックアップ機能およびリストア機能を提供します。CA ARCserve Backup に対応したエージェントとして、特定のオペレーティング システム専用のクライアント エージェントが用意されています。

クライアント エージェントは、ネットワーク コンピュータ上にインストールする独立したソフトウェア パッケージで、コンピュータと CA ARCserve Backup 間のネットワーク インターフェースを提供します。クライアント エージェントは、高い接続性を実現するだけでなく、ネットワーク上のバックアップ サーバとデータ ストレージ タスクを共有する機能を提供します。定期的なデータ バックアップおよびリストア機能を必要とするネットワーク マシンの数と種類によっては、複数のクライアント エージェントが必要となる場合があります。

本書では、ネットワーク ストレージ環境で使用するすべてのワークステーション およびサーバについて、クライアント エージェントのインストール、環境設定、および追加に関する情報を提供します。

クライアント エージェントを使用する利点

CA ARCserve Backup クライアント エージェントは、集中化されたバックアップ サーバとメディアでタスクを処理することにより、ネットワークリソースを維持する必要のある組織を対象に設計されています。クライアント エージェントは、以下のような機能を提供します。

- 通信ネットワークの負荷を最小限に抑えます。
- クライアント マシンでアーカイブ データの前処理を行うことで、CA ARCserve Backup サーバでの処理効率が向上します。
- リモートクライアントに関する詳細なファイル情報およびディレクトリ情報を CA ARCserve Backup サーバに提供します。
- サーバとの間で通信を行い、バックアップ コンポーネントをブラウザおよび選択できるようにします。
- バックアップ ジョブの処理状況の監視を支援します。
- バックアップおよびリストア アクティビティのステータスによるバックアップ ログの保持およびモニタ
- アプリケーションまたはファイル システムを容易にバックアップできます。

クライアント エージェントでは、1 台の CA ARCserve Backup サーバから、ネットワーク内のすべてのクライアント コンピュータ向けのデータ保護を強化することも可能です。

クライアント エージェントをネットワーク上のコンピュータにインストールすると、1 台の CA ARCserve Backup サーバを使用して、複数のコンピュータおよびオペレーティング システム上の、データのバックアップとリストアが可能になります。

サポートされているクライアントシステム

CA ARCserve Backup では、以下のプラットフォームをサポートするクライアントエージェントが提供されます。

注: サポートされているオペレーティングシステムとバージョンの詳細については、CA ARCserve Backup インストールメディアに含まれる「*Client Agent Readme ファイル*」を参照してください。

- CA ARCserve Backup Client Agent for Windows このクライアントエージェントは、以下の OS をサポートしています。
 - Windows Server 2008
 - Windows Server 2008 R2
 - Windows 7
 - Windows Vista™
 - Windows XP
 - Windows Server 2003
 - Windows Small Business Server (Windows 2003)
- CA ARCserve Backup Client Agent for UNIX このクライアントエージェントは、以下の OS をサポートしています。
 - AIX
 - HP-UX
 - Solaris
 - Tru64
 - FreeBSD
- CA ARCserve Backup Client Agent for Linux このクライアントエージェントは、以下の OS をサポートしています。
 - Red Hat
 - SuSE
 - Turbo
 - Debian
 - RedFlag
 - Miracle Linux
 - Asianux

- CA ARCserve Backup Client Agent for Mainframe Linux このクライアントエージェントは、以下の OS をサポートしています。
 - Red Hat Enterprise Server
 - SLES
- CA ARCserve Backup Enterprise Option for AS/400
- CA ARCserve Backup Client Agent for Mac OS X
- CA ARCserve Backup Enterprise Option for OpenVMS

Backup Agent 管理へのアクセス

Backup Agent 管理では、さまざまなエージェントとオプションを設定できます。ローカルシステム、接続、エージェントステータス、および環境設定オプションについて、エージェント デスクトップに関するデータを参照することができます。Backup Agent 管理では、以下のオプションが使用可能です。

- [サービス](#) (P. 74)
- [ネットワークの環境設定](#) (P. 34)
- [アクセスコントロールリスト](#) (P. 38)
- [Client Agent ログ ファイルの削除](#) (P. 72)
- AD オブジェクトレベルリストユーティリティ

Backup Agent 管理にアクセスする方法

1. Windows の[スタート]メニューから、[すべてのプログラム] - [CA] - [ARCserve Backup] - [Backup Agent 管理]を選択します。
[ARCserve Backup Agent 管理]ダイアログ ボックスが開きます。
2. ドロップダウンリストから、以下のいずれかのエージェントを選択します。
 - Agent for Microsoft Exchange
 - Agent for Microsoft SharePoint
 - Agent for Microsoft SQL Server
 - Agent for Virtual Machines
 - [Client Agent](#) (P. 28)
3. 環境設定アイコンをクリックします。
該当する環境設定ダイアログ ボックスが表示されます。
4. 必要なフィールドに入力し、[OK]をクリックします。
選択したエージェントが設定されました。

第 2 章: クライアント エージェントのインストール

バックアップまたはリストアの処理を実行するには、適切な CA ARCserve Backup クライアント エージェント ソフトウェアがインストールされ、実行されている必要があります。クライアント エージェントでは、ワークステーションと CA ARCserve Backup サーバ間の通信機能を提供します。この章では、クライアント エージェントのインストール方法について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[インストールに関する考慮事項 \(P. 17\)](#)

[クライアント エージェントのインストール \(P. 19\)](#)

[一般的なエージェントの自動インストール \(P. 19\)](#)

[Common Agent と Client Agent 用のインストール ディレクトリ \(P. 20\)](#)

インストールに関する考慮事項

以下のセクションでは、クライアント エージェントをインストールする前に確認する必要がある情報を説明します。

Client Agent for Windows

Client Agent for Windows をインストールまたは実行する前に、以下のいずれかのネットワークプロトコルを使用して通信するようにコンピュータを環境設定しておく必要があります。

- TCP/IP (伝送制御プロトコル/インターネットプロトコル)
- Windows Socket (WinSock)

Enterprise Option for OpenVMS

Enterprise Option for OpenVMS をインストールする前に、以下の考慮事項を確認します。

- サポートされている Alpha および VAX オペレーティング システムを実行しているコンピュータでは、以下の通信ソフトウェアを使用して、TCP または UDP (User Data Protocol) を使用できます。
 - Compaq UCX 4.2 eco 3 (Alpha)
 - Compaq UCX 3.3 eco 13 (VAX)
 - Compaq TCP/IP バージョン 5.0～5.3
 - Process Software Multinet バージョン 4.1B (パッチ)～4.4
 - Process Software TCPWARE バージョン 5.3 および 5.4

重要: これらの通信パッケージは、必要に応じて、1 台のコンピュータに複数インストールすることができますが、一度に実行できるのは 1 つだけです。1 台のコンピュータで同時に 2 つ以上の通信パッケージを実行しないでください。

注: OpenVMS TCP/IP スタックを変更した場合は、必ず OpenVMS Enterprise Option を再インストールしてください。

- OpenVMS Enterprise Option をインストールする前に、OpenVMS システムディスクをバックアップする必要があります。
- セットアップ ファイル用に、10 ブロック以上の空き領域があることを確認してください。

UNIX、Linux、および Mainframe Linux プラットフォームにインストールされたクライアント エージェント向けの通信要件

UNIX、Linux、および Mainframe Linux コンピュータにインストールされている CA ARCserve Backup エージェントと CA ARCserve Backup プライマリ サーバおよびメンバ サーバが確実に通信できるようにするためには、ファイアウォールがエージェント コンピュータ上に設定されている場合、そのファイアウォールを經由して CA ARCserve Backup がエージェントと通信できるようにする必要があります。エージェント コンピュータ上のファイアウォールの例外リストに CA ARCserve Backup を追加することで、CA ARCserve Backup とエージェント コンピュータとの通信を可能にすることができます。

エージェントをインストールする前に、エージェントコンピュータ上のファイアウォールの例外リストに CA ARCserve Backup を追加することをお勧めします。

この要件は、以下の CA ARCserve Backup コンポーネントに影響します。

- Client Agent for UNIX
- Client Agent for Linux
- Client Agent for Mainframe Linux
- UNIX プラットフォーム上の Oracle Agent
- Linux プラットフォーム上の Oracle Agent
- UNIX/Linux Data Mover

エージェントコンピュータ上でファイアウォールを設定する方法の詳細については、各プラットフォームのドキュメントを参照してください。

注: デフォルトでは、CA ARCserve Backup はポート 6051 を使用して通信します。

クライアント エージェントのインストール

Windows クライアント エージェントまたはクロスプラットフォーム エージェントをインストールするには、CA ARCserve Backup for Windows DVD を使用します。

CA ARCserve Backup クライアント エージェントのインストールの詳細については、CA ARCserve Backup インストールブラウザ上の以下のリンクをクリックします。

- Windows 以外のプラットフォーム用の CA ARCserve Backup Client Agent のインストール手順。
- UNIX/Linux Data Mover のインストール手順。

一般的なエージェントの自動インストール

UNIX、Linux、または Mac OS X のクライアント エージェントをインストールすると、CA ARCserve Backup Common Agent が自動的にインストールされます。

Common Agent と Client Agent 用のインストール ディレクトリ

以下の表では、CA ARCserve Backup Common Agent 用および UNIX と Linux プラットフォーム向け CA ARCserve Backup Client Agent 用のデフォルトインストールパスについて説明します。

プラットフォーム	バージョン	Common Agent /エージェント環境 設定ファイル	Client Agent (File System Agent)
AIX		/opt/CA/ABcmagt	/opt/CA/ABuagent
HP		/opt/CA/ABcmagt	/opt/CA/ABuagent
Solaris	SPARC 8、10 x86	/opt/CA/BABcmagt	/opt/CA/BABuagent
Solaris	SPARC 9、10	/opt/CA/ABcmagt	/opt/CA/ABuagent
Linux	SUSE Redhat Linux-OES Asianux Miracle Red Flag Turbo Linux	/opt/CA/ABcmagt	/opt/CA/ABuagent
Mainframe Linux	Red Hat SUSE	/opt/CA/BABcmagt	/opt/CA/BABuagent
FreeBSD		/opt/CA/BABcmagt	/opt/CA/BABuagent
Debian		/opt/CA/ABcmagt	/opt/CA/ABuagent
ESX		/opt/CA/ABcmagt	/opt/CA/ABuagent
Tru64		/opt/CA/BABcmagt	/opt/CA/BABuagent

注: 上記のディレクトリは、ファイルシステム エージェントおよび Agent for Oracle 用の他の関連する環境設定ファイルと共に Common Agent 環境設定ファイル(agent.cfg)の中にも記述されています。

オペレーティング システムのサポートされているバージョンの全リストについては、CA ARCserve Backup インストール メディアに含まれている Client Agent Readme ファイルを参照してください。

第 3 章: クライアント エージェントの追加と設定

CA ARCserve Backup およびその数種類のクライアント エージェントをインストール後、ネットワーク上の各クライアント エージェント マシンをバックアップ サーバに追加して設定する必要があります。この章では、クライアント エージェントの追加および設定の手順について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[Client Agents の追加](#) (P. 21)

[Windows Client Agent の設定](#) (P. 25)

[UNIX および Linux Client Agent の環境設定](#) (P. 42)

[AS/400 Enterprise Option の設定](#) (P. 63)

[OpenVMS Enterprise Option の設定](#) (P. 65)

Client Agents の追加

Windows サーバに CA ARCserve Backup をインストールしている場合、ノードの追加、インポート、エクスポート機能を使用してネットワークからクライアント エージェントを追加するか、手動でクライアント エージェントを追加することができます。以下のセクションでは、これらの方法について説明します。

エージェントおよびノードの追加、インポート、エクスポートの方法

複数のエージェントやノードが存在する環境でのジョブのセットアップは、時間や手間がかかる場合があります。複数のエージェントやノードをバックアップする場合、エージェントやノードを 1 つずつバックアップ マネージャに追加すると時間がかかります。エージェントの追加/インポート/エクスポート機能やノードの追加/インポート/エクスポート機能では、ノードやエージェントを実際にバックアップするかどうかに関係なく、CA ARCserve Backup ユーザ インターフェースを使って複数のノードやエージェントを追加できます。

注: セントラル エージェント管理でも、エージェントやノードを追加、インポート、エクスポートできます。

ノードの追加/インポート/エクスポート機能を使用して、次のいずれかの方法で複数のノードやエージェントをシステムに追加できます。

ユーザ インターフェースを使用して複数のノードやエージェントを追加する方法

1. バックアップ マネージャの[ソース]タブ、またはリストア マネージャの[デスティネーション]タブから、ノードを選択します。
2. [ノードの追加/インポート/エクスポート]ダイアログを使用して、すべてのノードやエージェントの名前を手動で入力するか、左側のペインにあるオートディスカバリで検出されたノードとエージェントのリストからノードを選択します。
3. ノードのユーザ名とパスワードを指定します。
4. 情報を CA ARCserve Backup データベースに保存します。
5. ノードとエージェントは、バックアップ マネージャの[ソース]ツリーまたは[セントラル エージェント管理]に表示されます。

.csv ファイルおよび .txt ファイルを使用して複数のノードやエージェントを追加する

1. バックアップ マネージャの[ソース]タブ、またはリストア マネージャの[デスティネーション]タブから、ノードを選択します。
2. [ノードの追加/インポート/エクスポート]ダイアログ ボックスのインポート機能を使用し、このユーザ インターフェースから .csv ファイルまたは .txt ファイルの名前を指定します。

ノードとエージェントの名前は .csv ファイルまたは .txt ファイルからインポートされ、システムに追加されます。
3. ノードとエージェントのユーザ名とパスワードを指定します。
4. ノードとエージェントは、バックアップ マネージャの[ソース]ツリーに表示されます。

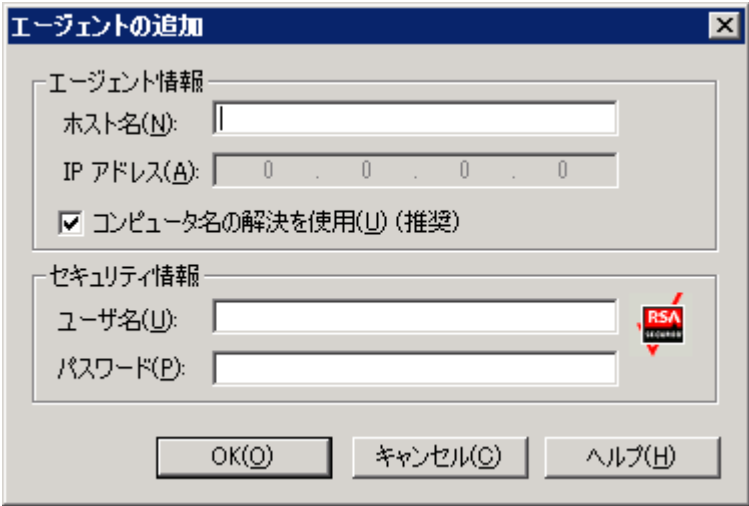
クライアント エージェントの手動追加

何らかの理由によりオート ディスカバリでネットワーク内のすべてのクライアント エージェントが検出されない場合、または特定のクライアント エージェントを追加したい場合は、Windows マネージャ インターフェイスを使用する Windows サーバに手動でクライアント エージェントを追加できます。手動でクライアント エージェントを追加するには、グループ ビューまたはクラシック ビューのどちらを使用する場合でも、各クライアント エージェント マシンをバックアップ マネージャに追加する必要があります。

グループ ビューでクライアント エージェントを手動で追加する方法

1. [バックアップ マネージャ]を開き、[ソース]タブをクリックします。
ソース ディレクトリ ツリーが表示されます。
2. ドロップダウンリストから[グループ ビュー]を選択します。
3. Client Agent など、適切なクライアント エージェント オブジェクトを右クリックします。
4. [マシン/オブジェクトの追加]を選択します。

[エージェントの追加]ダイアログ ボックスが表示されます。



5. [ホスト名]フィールドに、コンピュータ名を入力します。

6. コンピュータとの接続に使用するプロトコルを選択します。[TCP/IP]を選択します。**Windows** クライアント エージェントを追加する場合は、[コンピュータ名の解決を使用]を選択します。

コンピュータ名の解決を使用すると、バックアップまたはリストア処理のための接続時に、リモートの **Windows** マシンの IP アドレスをローカルの **Windows** マシンで自動的に検出できます。これを選択することをお勧めします。ユーザがコンピュータの IP アドレスを知らない場合にも有効です。

注: 対象の **Windows** コンピュータが動的 IP アドレスを使用している場合は、コンピュータの名前解決を使用してください。

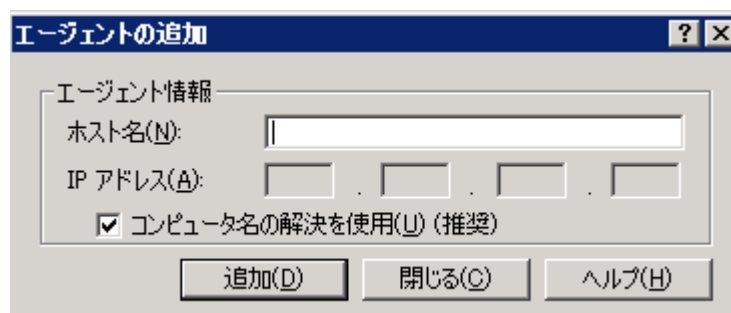
追加するエージェントが **Windows** クライアント エージェントではない場合に、**DNS** サーバまたはネットワークのさまざまな設定問題が原因でコンピュータの名前解決に失敗したり、対象のコンピュータの複数の IP アドレスの中から特定のアドレスを使用していることを確認したりする場合は、[コンピュータ名の解決を使用]オプションをオフにして、IP アドレスを入力します。

7. コンピュータ用のユーザ名とパスワードを[セキュリティ情報]セクションに入力します。
8. [OK]をクリックします。
サーバにクライアント エージェントが追加されます。

クラシックビューでクライアント エージェントを手動で追加する方法

1. [バックアップ マネージャ]を開き、[ソース]タブをクリックします。
ソース ディレクトリ ツリーが表示されます。
2. ドロップダウンリストから[クラシックビュー]を選択します。
3. **Windows** などの適切なクライアント エージェント オブジェクトを右クリックします。

- [マシン/オブジェクトの追加]を選択します。
[エージェントの追加]ダイアログ ボックスが表示されます。



- [Host Name] フィールドに、コンピュータ名を入力します。
- コンピュータとの接続に使用するプロトコルを選択します。[TCP/IP]を選択します。Windows クライアント エージェントを追加する場合は、[コンピュータ名の解決を使用]を選択します。

コンピュータ名の解決を使用すると、バックアップまたはリストア処理のための接続時に、リモートの Windows マシンの IP アドレスをローカルの Windows マシンで自動的に検出できます。これを選択することをお勧めします。ユーザがコンピュータの IP アドレスを知らない場合にも有効です。

注: 対象の Windows コンピュータが動的 IP アドレスを使用している場合は、コンピュータの名前解決を使用してください。

追加するエージェントが Windows クライアント エージェントではない場合に、DNS サーバまたはネットワークのさまざまな設定問題が原因でコンピュータの名前解決に失敗したり、対象のコンピュータの複数の IP アドレスの中から特定のアドレスを使用していることを確認したりする場合は、[コンピュータ名の解決を使用] オプションをオフにして、IP アドレスを入力します。

- [追加]をクリックします。
サーバにクライアント エージェントが追加されます。

Windows Client Agent の設定

以下のセクションでは、Windows Client Agent の環境設定オプションについて説明します。

Windows を環境設定する際の注意事項

Windows クライアント エージェントの環境設定に関する一般情報には以下のものがあります。

- **システム状態のリストア** - システム状態のリストアでは、[ファイルを元の場所にリストア]オプションをサポートします。

注: システム状態では、別の場所へのリストアもサポートします。ただし、リストア時にエージェントが作成したデフォルトのディレクトリにファイルを配置するため、処理システムを再作成しません。

- **共有サポート** - [エージェントを使用]オプションを選択した場合、共有名を物理パスに変換することにより、バックアップ マネージャの[優先する共有名/マシン名]オブジェクトで選択した共有がクライアント エージェントでバックアップされます。

注: Windows プラットフォームの場合、クライアント エージェントは共有をリストアしません。また、管理共有を除き、共有をデスティネーションとしてサポートしません。

- **システム ハイブのリストア処理** - KeysNotToRestore 機能は、システム ハイブの通常のリストア処理中に、機密性の高いシステムのレジストリ キーを保護するように設計されています。ただし、クライアント エージェントのレジストリ セッションを使用して個々のシステム キーをリストアする場合、この機能は利用できません。

セキュリティ設定のオプション

Client Agent for Windows のセキュリティオプションは、[設定]ダイアログ ボックスで定義します。セキュリティの種類には、以下の選択肢があります。

システム セキュリティ

Windows セキュリティを使用して、バックアップ、比較、リストアの操作が実行できます。Client Agent は、ネットワークのアクティブなユーザを装います。つまり、ユーザ名とパスワードを使用してログオンします。この ID とパスワードは、ローカル ユーザ データベース、またはワークステーションがドメインに属している場合はそのドメイン データベースに記録されている有効なユーザを特定するものです。

パスワードのセキュリティ

セキュリティのために個別のパスワードを設定できます。この設定によって、**Client Agent** をローカルのシステムアカウントで実行できるようになります。デフォルトでは、パスワードセキュリティは無効になっています。

注: パスワードセキュリティが選択され、マシンに DSA ベースのデータベースエージェント(たとえば、**Sybase**、**Informix** など)がインストールされている場合、ノード全体のバックアップはサポートされていません。データベースのみをバックアップするには、ジョブをサブミットする前に、[セキュリティおよびエージェント情報]ダイアログ ボックスでセキュリティ情報をシステムセキュリティに変更する必要があります。

バックアップの優先度およびリストア/比較の優先度オプション

Client Agent for Windows のプロセスの優先度は、[設定]ダイアログ ボックスで定義します。[バックアップの優先度]および[リストア/比較の優先度]で以下のいずれかの設定を選択します。

高

他の処理よりも優先して **Client Agent** の機能を実行します。

通常

通常の優先度で **Client Agent** の機能を実行します。

低

他のプロセスの休止中にクライアント エージェントのジョブを実行します。

複数同時のリストアまたは比較

Client Agent for Windows の同時リストアおよび比較は、[設定]ダイアログ ボックスで有効にします。**Windows Client Agent** で同時に複数のリストア ジョブまたは比較ジョブを受け入れる場合は、[設定]ダイアログ ボックスで[同時に複数のリストア ジョブまたは比較ジョブを許可する]オプションを有効にします。

バックアップおよびリストア実行オプション

Client Agent for Windows の実行オプションは、[設定]ダイアログ ボックスで定義します。実行前のプログラム、実行後のプログラムを選択して、実行遅延を定義します。

実行前

バックアップまたはリストア操作の前に自動的に実行するバッチ プログラム (例: C:¥WINAGENT¥PRE.COMD) の名前を入力または選択します。

実行後

バックアップ操作やリストア操作の後に自動実行するバッチ プログラムの名前(たとえば、C:¥WINAGENT¥POST.COMD)を入力または選択します。

実行遅延

バッチ ジョブの前後で、エージェントが待機する時間を秒単位で選択します。

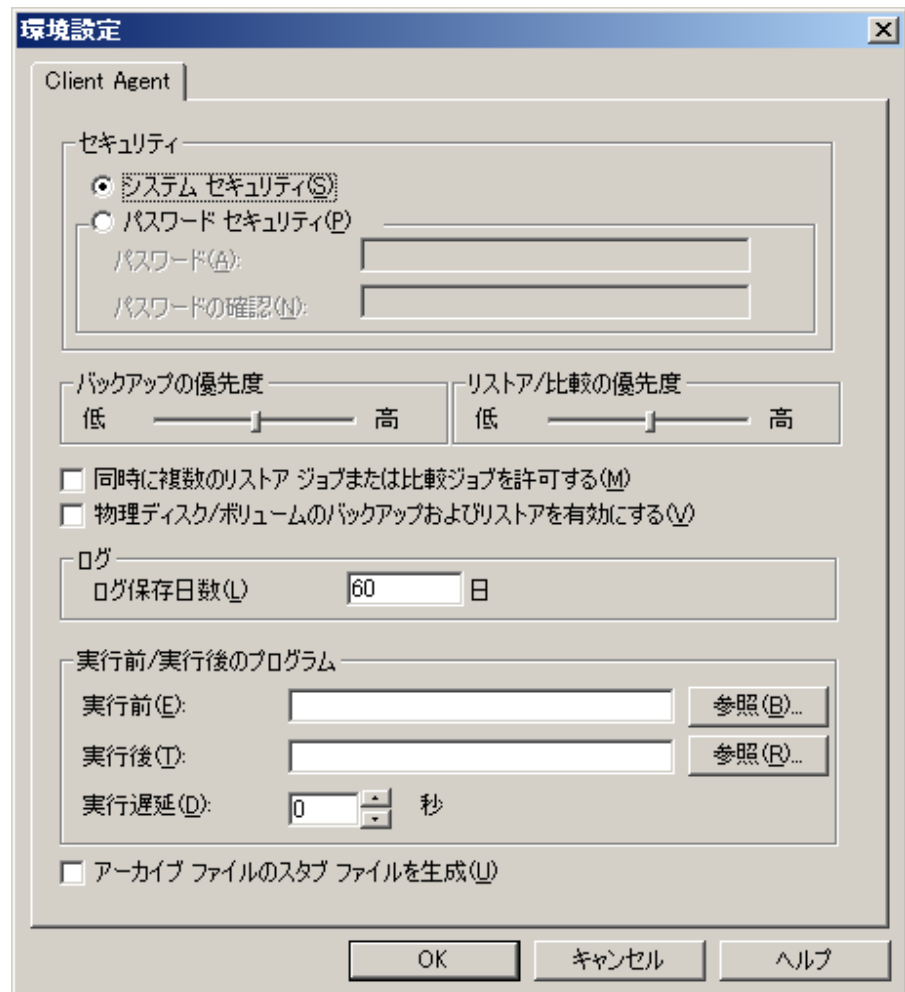
Backup Agent 管理による Windows パラメータの設定

Windows パラメータの設定に Backup Agent 管理を使用する方法

1. [スタート]-[プログラム] (または[すべてのプログラム])-[CA Technologies]-[ARCserve Backup エージェント]-[Backup Agent 管理]の順に選択し、Backup Agent 管理にアクセスします。

注: 使用しているオペレーティング システムによって、各クライアント エージェントのウィンドウの表示内容が多少異なる場合があります。

2. Backup Agent 管理から[オプション]タブを選択します。
[環境設定]ダイアログ ボックスが表示されます。



[環境設定]ダイアログ ボックスでは、以下の設定を定義できます。

- [セキュリティ] - 以下のいずれかのセキュリティのタイプを選択します。

[システム セキュリティ] - Windows のセキュリティを使用してバックアップ、比較、リストアの各操作を実行する場合に選択します。Client Agent は、ネットワークのアクティブなユーザを装います。つまり、ユーザ名とパスワードを使用してログオンします。この ID とパスワードは、ローカル ユーザ データベース、またはワークステーションがドメインに属している場合はそのドメイン データベースに記録されている有効なユーザを特定するものです。

注: システム セキュリティを選択すると、クライアント エージェントを使用してバックアップするパーティション、フォルダ、ファイルを選択し、クライアント エージェントのバックアップ アカウントが表示専用組織の管理の役割またはそれより高い権限を持つドメイン アカウントの場合、Exchange Server 2010 データベース ファイルはバックアップされません (つまり、それらはスキップされます)。パスワード セキュリティを選択し、ローカル管理者または表示専用組織の管理権限のないドメインアカウントのようなその他のアカウント役割を使用すると、Exchange Server 2010 データベースはスキップされません。これらのデータベース ファイルが使用されている場合、警告が表示されます。

[パスワード セキュリティ] - セキュリティを確保するために個々のパスワードを設定する場合に選択します。この設定によって、Client Agent をローカルのシステム アカウントで実行できるようになります。デフォルトでは、パスワード セキュリティは無効になっています。

- [バックアップ/リストア/比較の優先度] - バックアップ、リストア、または比較の各処理に必要なプロセスに与える優先順位を指定します。[バックアップの優先度]および[リストア/比較の優先度]で以下のいずれかの設定を選択します。

[高] - 他の処理よりも優先して Client Agent の機能を実行します。

[標準] - 通常の優先度で Client Agent の機能を実行します。

[低] - 他の処理が「アイドル」状態のときに、通常の優先度で Client Agent の機能を実行します。

- [同時に複数のリストア ジョブまたは比較ジョブを許可する] - Windows Client Agent で同時に複数のリストア ジョブまたは比較ジョブを受け入れる場合に、このオプションを有効にします。

注: デフォルトでは、このオプションは無効になっています。これは、リストア ジョブの実行中に、同じデータセットの新しいバックアップ ジョブまたはリストア ジョブが間違えて起動されないようにするためです。このような状況が発生すると、エージェントにより、新しいジョブのリクエストが拒否され、クライアント エージェントが使用中であることが CA ARCserve Backup サーバに報告されます。

- [物理ディスク/ボリュームのバックアップおよびリストアを有効にする] - 物理ディスクとボリュームの raw バックアップとリストアを実行できます。

注: 詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

- [ログ] - ログ ファイルは次のパスに格納されています。
<ARCserve_HOME>%ARCserve Backup Client Agent for
Windows%ntagent.log 実行されるすべてのジョブのログがこのログ ファイルに保存されます。

[ログ保存日数] - エージェントのログを保存する日数(デフォルトは 60 日)を指定します。指定した日数が経過すると、次のエージェントのバックアップ、リストア、または比較ジョブが実行される際にログが削除されます。

- [実行前/実行後のプログラム] - 以下の実行オプションを選択します。

[実行前] - バックアップ操作前に自動実行するバッチ プログラムの名前(たとえば、C:%WINAGENT%PRE.CMD)を入力または選択します。

[実行後] - バックアップ操作の後に自動実行するバッチ プログラムの名前(たとえば、C:%WINAGENT%POST.CMD)を入力または選択します。

[実行遅延] - バッチ ジョブの終了から Client Agent を開始するまでの時間、または Client Agent の終了からバッチ ジョブを開始するまでの時間(秒)を選択します。

- [アーカイブ ファイルのスタブ ファイルを生成] -- このオプションを選択すると、アーカイブ ジョブに含まれるデータについての情報を含むファイルが生成されます。

3. [OK]をクリックすると、設定が保存され、ダイアログボックスが閉じます。

注: 後で環境設定を変更するには、[環境設定]ダイアログボックスまで戻る必要があります。

パスワード セキュリティの設定

クライアントエージェント サービスは、ノード(マシン)ユーザ名と割り当てられたパスワードを使用して CA ARCserve Backup ネットワークにログオンします。

クライアントエージェントのパスワード セキュリティを設定する方法

1. バックアップ マネージャを起動し、マシン名を右クリックします。ポップアップメニューが表示されます。
2. コンテキストメニューから[セキュリティ]を選択して、[セキュリティ]ダイアログボックスを開きます。[ユーザ名]フィールドには、クライアントエージェントに割り当てられたユーザ名が表示されています。
3. クライアントエージェントのパスワードを入力します。

注: このユーザ名およびパスワードによって、ローカル マシンのデータベースに記録されている正規のユーザであることが識別されます。また、ワークステーションがドメインのメンバである場合は、ドメインのデータベースに記録されている正規のユーザであることが識別されます。

また、使用するアカウントを指定する場合、所属するドメイン名をそれぞれのアカウントに付与することで、2 つの同名アカウント(Administrator など)を区別する必要があります。ユーザ名を識別する際、ツリー形式の名前を使用することで、クライアントオブジェクトを識別できます。たとえば、「ENGINEER」というワークステーションを含む「NTDEV」というドメインの場合、それぞれの Administrator は以下のようになります。

NTDEV¥Administrator

ENGINEER¥Administrator

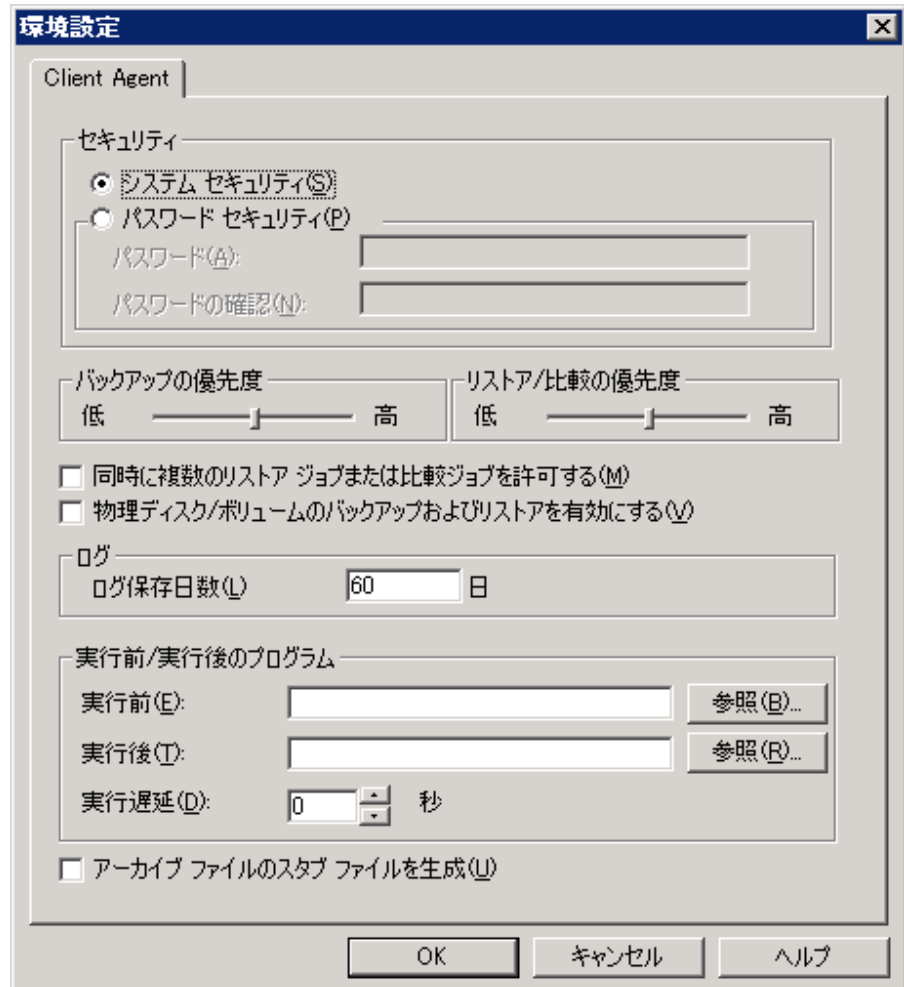
選択した環境設定の表示

環境設定に変更を加える前に、現在の設定を確認してください。

設定の選択を表示する方法

1. [Backup Agent 管理]ウィンドウを開きます。

2. [オプション]を展開して、[設定]を選択します。
現在の設定が表示されます。



raw バックアップおよびリストアの有効化

CA ARCserve Backup を使用して、物理ディスクおよびボリュームの raw バックアップおよびリストアを実行することができます。

物理ディスクおよびボリュームの raw バックアップおよびリストアを実行する機能は、デフォルトでは無効になっています。各エージェントのオプションを有効にする必要があります。

物理ディスク/ボリュームの raw バックアップおよびリストアを有効にする方法

1. Windows で [スタート]-[プログラム]-[CA]-[ARCserve Backup]-[Backup Agent 管理]を選択します。
[ARCserve Backup Agent 管理]ウィンドウが表示されます。
2. [オプション]-[環境設定]をクリックします。
[環境設定]ウィンドウが表示されます。
3. [物理ディスク/ボリュームのバックアップおよびリストアを有効にする]をクリックします。
4. [OK]をクリックします。

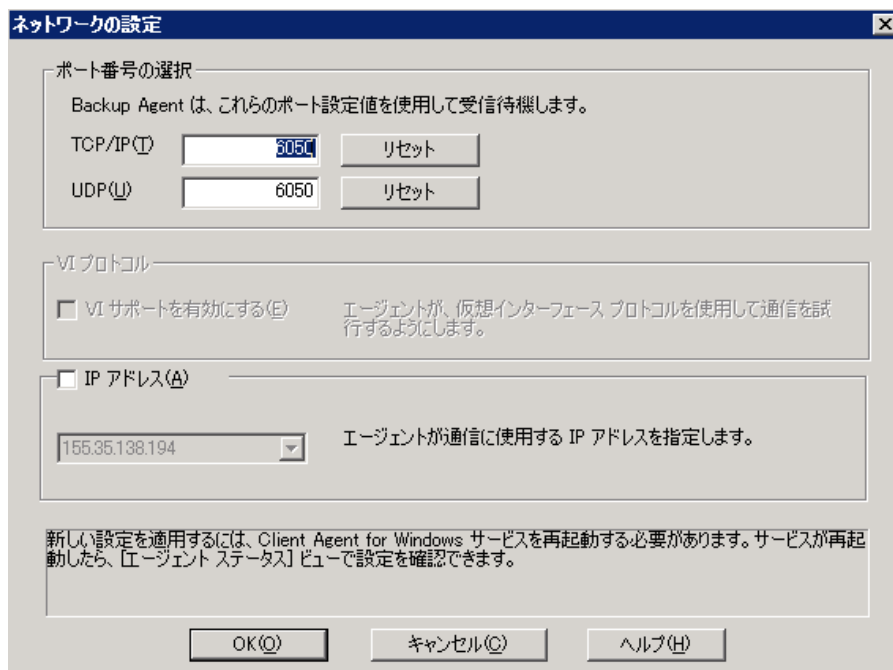
raw バックアップおよびリストアの機能がエージェントで有効化されます。raw バックアップおよびリストアの実行方法の詳細については、「[管理者ガイド](#)」を参照してください。

Windows ネットワーク通信の環境設定

CA ARCserve Backup クライアント エージェント サービスは、設定済みのすべてのクライアント エージェント全体で共有されます。デフォルトでは、Windows Client Agent はポート 6050 (TCP/UDP) を使用します。Backup Agent 管理の [ネットワークの設定]メニューからこの動作を変更できます。

Windows ネットワーク通信を設定する方法

1. [Backup Agent 管理] ウィンドウを開きます。
2. [オプション] メニューで、[ネットワークの設定] を選択します。



3. このダイアログ ボックスを使用して、クライアント エージェントに対する以下のネットワーク パラメータを設定します。
 - [ポート番号の選択] - デフォルトを受け入れるか、CA ARCserve Backup で使用するポート番号を入力します。元のデフォルトポートを使用する場合は、[リセット] ボタンをクリックします。更新されたポート情報は、ローカルの¥Program Files¥CA¥SharedComponents¥ARCserve Backup にある PortsConfig.cfg ファイルに保存されます。

注：更新されたポート情報は、CA ARCserve Backup サーバ コンポーネントに登録する必要があります。ポート情報を登録するには、リモートサーバ上の PortsConfig.cfg を修正します。ポートの設定の詳細については、「実装ガイド」を参照してください。

- **[IP アドレス]** - Windows Client Agent は、複数のネットワーク インターフェイスカード (NIC) の使用をサポートしています。コンピュータが複数の NIC を搭載している場合、Agent にはマシン上で有効なすべての NIC が表示されます。バックアップ専用使用する NIC の IP アドレスを選択することにより、すでに選択されているアドレスを手動で無効にできます。この設定を定義する場合、Client Agent はこのインターフェイスカードのみを使用します。他のすべての NIC は無視され、それらの IP アドレスは Client Agent への接続に使用できません。

更新した情報は、Windows の CAPortConfig.cfg ファイルでも同様に修正し、CA ARCserve Backup のホーム ディレクトリにコピーする必要があります。

例:

```
#Hostname IP address (optional) TCP ポート UDP ポート
#myhost   nnn.nnn.nnn.nnn      6050      6050
mymachine nnn.nnn.nnn.nnn      7090      7085
```

ワークステーション パスワードの設定

[Backup Agent 管理]で Windows クライアント エージェントの設定中に[パスワード セキュリティ]をオンにした場合は、CA ARCserve Backup でも同じパスワードを指定する必要があります。

ワークステーション パスワードを設定する方法

1. バックアップ マネージャで、クライアント エージェントの名前を右クリックします。
2. コンテキスト メニューから[セキュリティ]を選択します。



- ローカルの Windows ユーザ アカウント名を入力するか、Windows ドメイン アカウントをツリー形式で入力します。
- パスワードを入力して[OK]をクリックします。

注: クライアント エージェントを使用してリモートクライアントのバックアップ およびリストアを行う場合、クライアント エージェント用に設定されたパスワードはワークステーション用に設定されたシステム アカウントのパスワードよりも優先されます。バックアップ ジョブでクライアント エージェントソフトウェアを使用しない場合は、[バックアップ マネージャ]ウィンドウで、システム アカウントのパスワードを指定する必要があります。バックアップ マネージャ上のパスワードとシステム アカウントのパスワードが一致していることを確認します。

Windows アクセス コントロール リストの作成

アクセス コントロール リスト (ACL) を生成することで、Windows クライアント エージェント オブジェクト上でバックアップを実行する権限を持つサーバを制限できます。この機能は、バックアップ マネージャおよび Backup Agent 管理で定義できます。アクセス コントロール リストを作成し、そのタイプを定義することにより、データ バックアップとリストアの処理を、特定のクライアント エージェントについて特定のグループの CA ARCserve Backup サーバのみで実行するように制限できます。ACL の種類は以下のとおりです。

ACL を使用しない

リストを指定しません。これはデフォルト設定です。

対象サーバリスト

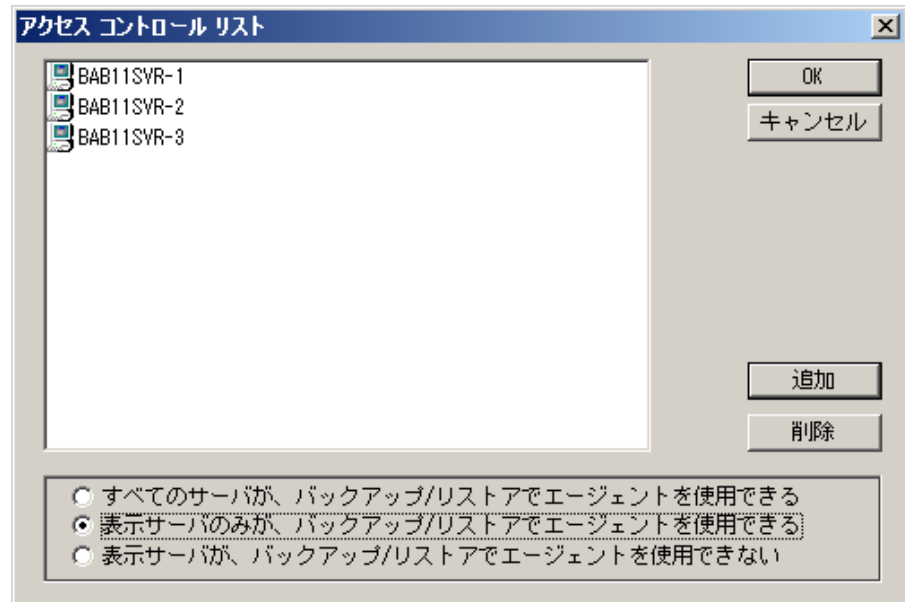
バックアップおよびリストア オプションのために、クライアント エージェント マシンへのアクセスが許可されているサーバのリスト。

除外サーバリスト

バックアップおよびリストアの処理のために、クライアント エージェント マシンへのアクセスが許可されていないサーバのリスト。ネットワーク上の他のサーバはすべて、クライアント オブジェクトにアクセスできます。

Windows アクセスコントロール リストを作成する方法

1. [Backup Agent 管理]ウィンドウを開きます。
2. [オプション]メニューから[アクセスコントロールリスト]を選択します。



3. デフォルトの設定ではACLを使用しないので、[アクセスコントロールリスト]ダイアログボックスが表示されると、[すべてのサーバが、バックアップ/リストアでエージェントを使用できる]オプションがオンになっています。ACLを作成するには、以下のオプションのいずれかを選択します。
 - [表示サーバのみが、バックアップ/リストアでエージェントを使用できる]
 - [表示サーバが、バックアップ/リストアでエージェントを使用できない]
4. [追加]ボタンをクリックして、必要な数のクライアントエージェントの名前をアクセスコントロールリストに追加します。リストからクライアントエージェントを削除するには、削除する各クライアントエージェントに対し、[削除]ボタンをクリックします。
5. クライアントエージェントの名前の追加または削除が終了したら、[OK]ボタンをクリックします。

ウイルス スキャンを実行する

CA Anti-Virus ソフトウェアは、重要なデータに対する保護を強化し、バックアップおよびリストア アクティビティの実行中にもウイルスの脅威からデータを保護します。

このオプションを使用すると、バックアップ、コピー、カウント、およびリストアの処理中に、自動的にウイルスを検出してファイルを修復するように、Windows クライアントエージェントを環境設定できます。

ウイルス スキャンを有効にする方法

1. バックアップ マネージャまたはリストア マネージャを開きます。
2. ツールバーの[オプション]ボタンをクリックし、[グローバル オプション]ダイアログ ボックスを表示します。
3. [ウイルス]タブをクリックします。
4. [ウイルス スキャンを実行]を選択します。
5. クライアントエージェントに適用するウイルス スキャン オプションをクリックします。利用可能なオプションを以下に示します。

スキップ

ウイルス感染したファイルをバックアップ/リストアしません。

名前の変更

感染ファイルの拡張子を「AVB」に変更します (例: 0.AVB、1.AVB、2.AVB)。拡張子が AVB の同名のファイルが存在する場合、システムは、その拡張子に数字を付けた拡張子を使用してファイルの名前を変更します。たとえば、AV0、AV1、AV2 を使用します。

削除

ウイルスに感染したファイルを削除します。

修復

CA Anti-Virus で感染ファイルとして検出されたファイルを修復します。[修復]オプションを使用すると、ユーザが関与することなく、バックアップ処理中に自動的に感染ファイルが修復されます。

6. 各アーカイブに含まれる個々のファイルを検査するには、[圧縮ファイルのスキャンする]オプションをオンにします。

注: このオプションをオンにすると、バックアップまたはリストアのパフォーマンスが低くなります。

カスタマイズ可能なローカル オプション

クライアントエージェント オブジェクトを右クリックすると、ローカル バックアップ オプションをカスタマイズできます。明示的なジョブ パッケージの詳細については、「実装ガイド」を参照してください。ローカル オプションをカスタマイズする際にソースを選択する方法については、「管理者ガイド」を参照してください。

Client Agent for Windows がバックアップからデータベース アプリケーション ファイルを除外する仕組み

Client Agent for Windows は、バックアップの実行時に、Microsoft Exchange および Microsoft SQL Server などのデータベース アプリケーションのバックアップから、データベース ファイルおよびログ ファイルを除外できます。

バックアップ ジョブの実行中に、Client Agent for Windows はデータベース エージェントと通信し、バックアップ ジョブがファイル システム バックアップから除外する必要のあるファイルのリストを取得します。その後、Client Agent for Windows は、データベース エージェントから受信した応答に基づき、ファイル システム バックアップからファイルを除外します。データベース エージェントがオフラインの場合、Client Agent はすべてのファイルをバックアップする必要があるとみなし、ファイル システム バックアップ ジョブはその前提で処理されます。

例:

バックアップ ソースとして Microsoft Exchange Server ディレクトリを選択し、Client Agent for Windows を使用してファイル システム バックアップを実行すると、以下の除外動作が発生します。

- Exchange 情報ストアがオンラインの場合、Agent for Microsoft Exchange Server は、バックアップ ジョブから除外する必要のある Exchange データベース ファイルおよびログ ファイルのリストを提供します。

その結果、CA ARCserve Backup は除外されたファイルをスキップし、ファイル システム バックアップを完了します。

- Exchange 情報ストアがオフラインの場合、Agent for Microsoft Exchange Server は、バックアップ ジョブから除外する必要のある Exchange データベース ファイルおよびログ ファイルとして空のリストを提供します。

その結果、CA ARCserve Backup は Exchange サーバ ファイルをスキップせず、ファイル システム バックアップにすべてのファイルを含めます。

UNIX および Linux Client Agent の環境設定

UNIX または Linux のクライアント エージェントの環境設定ファイルである `uag.cfg` は、クライアント エージェントのホーム ディレクトリのリモートクライアントワークステーションにあります。このファイル (ジョブがワークステーションにサブミットされるたびに、エントリがスキャンされます) は、クライアント エージェントに関連する複数のオプションを設定するのに使用できます。

重要: エージェントの環境設定の変数は、CA Technologies テクニカル サポートの担当者より指示がない限り変更しないでください。

UNIX および Linux の環境設定の際に考慮する事項

UNIX および Linux プラットフォームの環境設定で注意する必要がある点は、以下のとおりです。

- **セッション パスワード** - UNIX および Linux セッションには 22 バイトより長いセッション パスワードを使用できません。
- **1 文字のディレクトリ名** - 1 文字のディレクトリ名をリストアするときに、リストアビューにメッセージが表示されることがあります。データはデータベースビューには正しく表示されます。
- **シンボリックリンクのトラバースと NFS のトラバース** - [シンボリックリンクのトラバース] および [NFS のトラバース] オプションは、リストア処理ではサポートされていません。

注: これらクライアント エージェントに対する CA ARCserve Backup オプション定義の中の環境設定に矛盾が存在する場合は、手動で `uag.cfg` 環境設定ファイルに入力したオプションより、バックアップ マネージャを使用して設定したオプションの方が必ず優先されます。

UNIX および Linux クライアントエージェントのコントロール ファイル

UNIX および Linux クライアントエージェントのコントロール ファイルでは、特定のワークステーションで実行するバックアップ処理から除外するディレクトリ、ファイル システム、またはファイル システムの種類を指定します。特に、以下のパッケージを UNIX および Linux クライアントエージェントとしてインストールする必要があります。

- Universal Agent
- Universal Agent (uagent)

注: Uagent をインストールする前に、Common Agent がインストールされている必要があります。

両方のパッケージでインストールされるコントロール ファイルを以下に示します。

- ディレクトリ コントロール ファイル

ディレクトリ コントロール ファイルである `uag.cntl` を使用して、ワークステーションで実行するバックアップ処理から除外するすべてのディレクトリまたはファイル システム(またはその両方)をリストします。このファイルでディレクトリおよびファイル システムを指定するには、スラッシュ (/) で始まる、完全なパス名を 1 行で入力します。例:

```
/opt/account1
```

注: ディレクトリ コントロール ファイルは、クライアント エージェントワークステーション上の `uagent` のホーム ディレクトリに保存されます。

- ファイル システム コントロール ファイル

ファイル システム コントロール ファイルである `fs.cntl` は、バックアップ処理から除外する、特定のワークステーションのファイル システム タイプをリストします。特定のファイル システム タイプを除外するには、`fs.cntl` ファイル内に 1 行ずつファイル システム タイプを入力します。

注: ファイル システム ファイルは、クライアント エージェントワークステーション上の `uagent` のホーム ディレクトリに保存されます。

- ブラウザ環境設定ファイル

ブラウザ環境設定ファイルである `cabr.cfg` により、`raw` デバイスをブラウザに表示できます。`cabr.cfg` ファイル内の独立した行に `raw` デバイスの絶対名が入力されていることを確認する必要があります。

- BrightStor ARCserve Backup Universal Agent 環境設定ファイル

BrightStor ARCserve Backup Universal Agent 環境設定ファイルである `agent.cfg` は、システムにインストールした UNIX または Linux クライアントエージェントを確認します。このスクリプトは、`uagent` がインストールされると自動的に実行されます。

注: システム管理者のみが、ディレクトリコントロールファイルおよびファイルシステムコントロールファイルを編集できます。ただし、システム管理者がファイルに設定したアクセス権によっては、他のユーザでもファイルに内容を追加できる場合があります。

UNIX および Linux の Common Agent 環境設定ファイル

Common Agent (`caagentd` バイナリ) は、すべての UNIX、Linux、および Mac OS X クライアントエージェントの標準コンポーネントです。これは、UNIX、Linux、または Mac OS X クライアントエージェントの初めてのインストール中に自動的にインストールされます。

Common Agent は、`/opt/CA/BABcmagt` ディレクトリにあります。Common Agent は、`/opt/CA/BABcmagt` ディレクトリにある `agent.cfg` という環境設定ファイルを使用して、システム上にインストールしたクライアントエージェントを追跡します。

注: CA ARCserve Backup は、さまざまな UNIX および Linux プラットフォーム上の別々のディレクトリに Common Agent、ファイルシステムエージェント、および Agent for Oracle 用の関連する環境設定ファイルをインストールします。詳細については、「[UNIX および Linux 用の Common Agent および Client Agent のインストール ディレクトリ \(P. 20\)](#)」を参照してください。

クライアントエージェントを新規にインストールすると、`agent.cfg` ファイルは新しいクライアントエージェントの情報で更新されます。この環境設定ファイルは、通常は修正する必要がありません。このファイルを手動で修正する必要があるのは、一部のデバッグメッセージを有効にする場合、または Common Agent が実行されるデフォルト TCP/IP ポートを変更する場合のみです。

クライアントエージェントがインストールされた環境にある `agent.cfg` ファイルの例を以下に示します。

```
[0]
#[ABagntux]
NAME    ABagntux
VERSION nn.nn.nn
HOME    /opt/CA/ABuagent
ENV     CA_ENV_DEBUG_LEVEL=4:$CA_ENV_DEBUG_LEVEL
ENV     LD_LIBRARY_PATH=/opt/CA/CAlib:/opt/CA/ABcmagt:$LD_LIBRARY_PATH
ENV     SHLIB_PATH=/opt/CA/CAlib:/opt/CA/ABcmagt:$SHLIB_PATH
ENV     LIBPATH=/opt/CA/CAlib:/opt/CA/ABcmagt:$LIBPATH
BROWSER cabr
AGENT   uagentd
MERGE   umrgd
VERIFY  umrgd

[36] DISABLED
#[ABcmagt]
#NAME    ABcmagt
#HOME    /opt/CA/ABcmagt
#TCP_PORT 6051
#UDP_PORT 6051
```

Common Agent 環境設定ファイル構造

`agent.cfg` ファイルの各セクションには、バックアップ ネットワークで UNIX または Linux デバイスにインストールされたクライアント エージェントに直接対応する一連のフィールドが含まれます。すべてのフィールドは、クライアント エージェントのホーム ディレクトリを除き、あらかじめ定義されています。

クライアント エージェントのインストールおよび環境設定時に、環境変数 (ENV) フィールドも決定されます。ただし、必要に応じて環境変数フィールドの値を手動で入力することも可能です。`agent.cfg` ファイルの変更は、特定のデータベースに追加の環境フィールドを関連付ける必要がある場合など、特定の状況下でのみ行ってください。

注: `agent.cfg` ファイルの変更は、クライアント エージェント マシンの開始、終了、または再起動の後でのみ実行できます。

agent.cfg ファイルの例と各エージェントフィールドの説明を以下に示します。

ファイル内容	フィールドの説明
[0]	UNIX および Linux の、オブジェクトタイプ、ネットワーク上の特定のクライアントエージェントの定義済みの数
[4]	Mac OS X のオブジェクトタイプ、ネットワーク上の特定のクライアントエージェントの定義済みの数
NAME ABagntux	クライアントエージェントの名前
VERSION nn.n	クライアントエージェントのリリース番号およびバージョン番号
HOME /opt/CA/ABuagent	クライアントエージェントのデフォルトのホーム ディレクトリ
#ENV CA_ENV_DEBUG_LEVEL=4	クライアントエージェントに渡す環境変数
#ENV CAAGPERF_ENABLE=1	Solaris および HP システムでスナップショットおよび Direct I/O 機能を有効にします。詳細については、「スナップショットの設定および直接 I/O」のセクションを参照してください。
ENV LD_LIBRARY_PATH	Sun、Linux、および Tru64 での共有ライブラリの検索パス
ENV SHLIB_PATH	HP での共有ライブラリの検索パス
ENV LIBPATH	AIX での共有ライブラリの検索パス
BROWSER cabr	クライアントエージェントのブラウザ モジュール
AGENT uagentd	クライアントエージェントデーモンのバックアップ モジュール
MERGE umrgd	デーモンのマージ
VERIFY umrgd	デーモンのスキャン

クライアントエージェントのホーム ディレクトリ

クライアントエージェントのデフォルトのホーム ディレクトリ (**ABuagent**) は、インストールおよびセットアップ中に自動的に定義されます。ただし必要に応じて、別のホーム ディレクトリを指定することもできます。

ホーム ディレクトリの名前を指定するには、**agent.cfg** ファイルの **ABagntux** セクション以下を調べます。クライアント エージェントのホーム ディレクトリの名前は、**HOME** 変数により定義されます。

Common Agent のコンポーネント

Common Agent は、常にデーモンとして動作し、システム上にインストールされた **UNIX**、**Linux**、および **Mac OS X** クライアントエージェントの代わりに要求を受信待機します。各エージェントのインストール時に、**BROWSER**、**AGENT**、**MERGE**、および **VERIFY** の各コンポーネントが **Common Agent** の独立したセクションに登録されます。

エージェントによっては、これらのコンポーネントの一部のみを備えたものもあります。たとえば、サンプルの環境設定ファイルでは、**UNIX** または **Linux** 用のセクションに、**BROWSER** コンポーネントの **cabr**、**AGENT** コンポーネントの **uagentd**、および **MERGE** と **VERIFY** コンポーネントの **umrgd** が登録されています。同様に、他のクライアントエージェントは他の **BROWSER** コンポーネントおよび **AGENT** コンポーネントを使用します。

```
[0]
#[ABagntux]
NAME          ABagntux
VERSION       nn.nn.nn
HOME          /opt/CA/ABuagent
ENV           CA_ENV_DEBUG_LEVEL=4:$CA_ENV_DEBUG_LEVEL
ENV           LD_LIBRARY_PATH=/opt/CA/CALib:/opt/CA/ABcmagt:$LD_LIBRARY_PATH
ENV           SHLIB_PATH=/opt/CA/CALib:/opt/CA/ABcmagt:$SHLIB_PATH
ENV           LIBPATH=/opt/CA/CALib:/opt/CA/ABcmagt:$LIBPATH
BROWSER       cabr
AGENT         uagentd
MERGE         umrgd
VERIFY        umrgd
```

ポートアドレスの設定

TCP および UDP のデフォルトポートは **6051** です。この TCP ポートを使用して、バックアップ サーバとクライアント エージェント間で通信とデータ転送が行われます。バックアップ マネージャのユーザ インターフェースでは、UDP ポートを使用してホストをブラウズします。

TCP ポートと UDP ポートのいずれか、または両方の環境設定を行う場合、以下の環境設定ファイルを CA ARCserve Backup サーバおよびクライアント エージェント側の両方で変更して、値を一致させる必要があります。

環境設定ファイルの名前は以下のとおりです。

- **CAPortConfig.cfg** - CA ARCserve Backup Windows サーバ用
- **agent.cfg** - クライアント エージェント

注: UNIX、Linux、およびの Mac OS X 環境設定ファイルに関する重要な情報については、「UNIX、Linux、および Mac OS X Client エージェントコントロール ファイル」を参照してください。

この例は、Windows サーバ環境設定ファイル(CAPortConfig.cfg)です。

```
#Hostname IP address (optional) TCP ポート UDP ポート
#myhost   nnn.nnn.nnn.nnn      6051      6051
```

この例は、クライアント エージェントの環境設定ファイル(agent.cfg)用の構文です。

```
[36]
NAME          ABcmagt
HOME          /opt/CA/ABcmagt
TCP_PORT      7090
UDP_PORT      7085
```


Common Agent のポート番号

デフォルトでは、Common Agent は TCP および UDP の両方でポート番号 6051 を使用します。このデフォルトのポートを変更するには、agent.cfg ファイルの ABcmagt セクションに新しいポート番号を指定した後、caagent stop コマンドに続いて caagent start を入力して、Common Agent を再起動する必要があります。ポート番号の変更後に caagent の update コマンドを使用しないでください。

注: 通常の状態では、この方法で、Common Agent を開始または停止しないでください。代わりに、システムにインストールされている UNIX および Linux クライアントエージェントに用意されている start スイッチおよび stop スイッチを実行します。

以下は、スクリプトを変更前と変更後の環境設定ファイルの例です。

変更前:

```
[36]
#[ABcmagt]
#NAME          ABCmagt
#HOME          /opt/CA/ABcmagt
#TCP_PORT     6051
#UDP_PORT     6051
```

変更後:

```
[36]
#[ABcmagt]
NAME          ABCmagt
HOME          /opt/CA/ABcmagt
TCP_PORT     9051
UDP_PORT     9051
```

Common Agent を再起動しない限り、ポートの変更は有効になりません。デフォルトポート以外のポートで実行するように Common Agent の環境設定を行う場合、この Common Agent にアクセスできるように CA ARCserve Backup サーバを環境設定する必要もあります。これは、CAPortConfig.cfg ファイルにクライアントエージェントのエントリを追加することで実行できます。このファイルは、バックアップサーバ上のホームディレクトリの config サブディレクトリ \$BAB_HOME/config/port.cfg にあります。

デフォルトでは、Common Agent は他の UDP ポートである 0xA234 (41524) を使用して、UNIX、Linux、および Mac OS X クライアントエージェントに対する CA ARCserve Backup のオートディスカバリ要求を受信します。このポートは設定不可です。

ホストと信頼関係にあるユーザの認証情報

Common Agent でユーザの認証情報を確認する場合は、ホストとの信頼関係が優先されます。UNIX または Linux システムでは、特定のユーザが特定のホストにアクセスする際に、認証情報を要求しないようにセットアップすることが可能です。このようなアクセスを可能にするには、それら特定のユーザ ID を `/etc/hosts.equiv` ファイルまたは `rhosts` ファイルに追加します。デフォルトでは、Common Agent はこれらの規則に従い、認証のためにユーザのパスワードを確認します。ホストとの信頼関係の確認を無効にするには、以下の例に示すように、`agent.cfg` ファイルで `NO_HOSTS_EQUIV=1` 環境変数を指定します。

```
[36]
#[ABcmagt]
NAME    ABcmagt
HOME    /opt/CA/ABcmagt
ENV     NO_HOSTS_EQUIV=1
```

必要に応じてアクセスコントロールリストを設定し、Common Agent を No Password モードまたは Single User モードにすることができます。ACL の詳細については、「[UNIX、Linux および Mac OS X のアクセスコントロールリスト \(P. 60\)](#)」を参照してください。

Common Agent の接続要求の動作

クライアントエージェントセッションを開始するために、CA ARCserve Backup サーバは、UNIX、Linux、または Mac OS X クライアントエージェントとの接続を要求して、特定のバックアップコンポーネント(BROWSER、BACKUP、または RESTORE など)を使用できるようにします。この要求を受信すると、Common Agent は接続を受け入れ、システムに対するユーザの認証情報を検証します。

ユーザの検証が終わると、Common Agent は、その特定のクライアントエージェントおよび指定されたコンポーネントに対応するエントリがあるかどうか、`agent.cfg` ファイルを確認します。クライアントエージェントおよび要求されたコンポーネントの両方の検証が完了しない限り、Common Agent はクライアントエージェントとコンポーネントを有効にしません。Common Agent は、新たな要求を待機する状態に戻ります。

環境設定可能なオプション

オプションを使用して、クライアントエージェントの操作を最適化およびカスタマイズできます。ただし、これらのどのオプションも、クライアントエージェントを実行するための必須オプションではありません。UNIX、Linux、Mac OS X のクライアントエージェントの開始時に使用可能なすべてのオプションを以下の表に示します。

注: これらのオプションは、UNIX または Linux の知識を持つ管理者が慎重に設定する必要があります。オプションやパラメータの意味を理解していない場合は、CA Technologies のテクニカル サポートの担当者より指示がない限り、これらの機能を設定しないでください。

オプション	詳細
-ALLOW <network address> <host address>	Single User モードでこのオプションに -S または -NOPASSWORD オプションを付けて使用すると、クライアントエージェントへのアクセスを検証なしで許可されたコンピュータの IP アドレスを定義できます。
	-ALLOW N:172.16.0.0(255.255.255.0) H:172.31.255.255
	この例では、 N はネットワークアドレス、 H はホストの IP アドレスを示します。サブネットマスクを設定することもできます。
オプション	詳細
-b bufsize	ディスクの I/O バッファのサイズをバイト単位で定義します。16384 バイトから 65536 バイトの範囲で設定可能で、デフォルト値は 65536 バイトです。
-c n	待機中のスリープ時間をミリ秒(ms)単位で指定します。0 ミリ秒から 1000 ミリ秒の範囲で設定可能で、デフォルト値は 50 ミリ秒です。
-CAUSER USER	Single User モードを定義します。 -S または -NOPASSWORD オプションとともに使用して、ユーザごとに許可リストまたは禁止リストを設定します。

例:

```
-CAUSER A: USER1 N: USER2
```

この例では、A は-ALLOW、N は-DENY を意味します。

オプション	詳細
-DENY <network address> <host address>	Single User モードでこのオプションと一緒に-S または-NOPASSWORD オプションを使用すると、クライアント エージェントへのアクセスを許可されていないコンピュータの IP アドレスを定義できます。

例:

```
-DENY N:172.16.0.0(255.255.255.0) H:172.31.255.255
```

この例では、N はネットワーク アドレス、H はホストの IP アドレスを示します。サブネット マスクを設定することもできます。

オプション	詳細
-l	クライアント エージェントによって推奨ロックがチェックされます。デフォルト設定は、必須ロックのみ有効です。
-m <i>maxbuf</i>	I/O に割り当てられたバッファ数を設定します。2 から 1024 の範囲で設定可能で、デフォルト値は 128 です。
-NOPASSWORD	-ALLOW、-DENY、または-CAUSER のいずれかのオプションを使用する必要がある場合、このオプションを指定します。このオプションは、パスワードを必要としない Single User モードでの-S オプションと同じです。
-P <i>n</i>	コマンドの後に可変数(<i>n</i>)を続けて、デフォルトのタイムアウトを指定します。タイムアウトは、ユーザが分単位(0 ~ 10)で指定できます。デフォルトは 5 分です。

たとえば、**-P 10** オプションを指定すると、バックアップ スクリプトやリストア スクリプトを実行するまでの待ち時間が **10 分**となります。

注: 変数 *n* を指定せずに **-P** オプションを使用すると、エラーが発生します。

オプション	詳細
-Prebackup filename	実行しているバックアップ ジョブまたはリストア ジョブに関連した、ジョブの前後に実行するデフォルトのスクリプトを指定します。ファイル名はオプション
-Postbackup filename	です。ファイル名が指定されていない場合は、 <code>uag_pre_backup</code> をファイル名として使用します。
-Prerestore filename	
-Postrestore ファイル名	
-S	Single User モード オプションを有効にします。Single User モードでは、ユーザー認証で正規のユーザ ID およびパスワードを確認しません。代わりに、 -ALLOW 、 -CAUSER 、または -DENY オプションに応じてアクセスが許可されます。詳細については、「特定のオプション」を参照してください。
-s async nonblocking	ソケット I/O を非同期、非ブロック モードに設定します。
-s bufsize	ソケット バッファのサイズを指定します。4096 から 65536 の範囲で設定可能です。デフォルト値は、システムによって異なります。
-s SocketMode	バックアップ処理にソケット モードを使用するように指定します。
-sparse	スパースファイルと通常ファイルの処理を区別します。このオプションにより、スパースファイルのバックアップおよびリストア処理の効率が向上します。 注: クォータファイルは、 -sparse が指定されているかどうかに関係なく、バックアップおよびリストアの処理で常にスパースファイルとして扱われます。
-verbose または -v	システムを冗長 (Verbose) モードにして、詳細なデバッグ メッセージをコンソールから入力できるようします。

UNIX のスナップショットおよび Direct I/O のサポート

UNIX クライアントエージェントでは、スナップショットおよび Direct I/O 機能がサポートされています。これらの機能を活用するには、UNIX クライアントエージェントを実行するマシン上に、以下のいずれかの環境が存在する必要があります。

機能	プラットフォーム	ソフトウェア要件
スナップショット	Solaris	fssnap パッケージがインストールされている UFS ファイルシステム (Solaris8 および 9) または高度なバージョンの VxFS ファイルシステム。
スナップショット	HP-UX 11.0	高度なバージョンの VxFS ファイルシステムまたは Online Journaling File System (JFS)。
Direct I/O	Solaris	UFS ファイルシステムまたは VxFS ファイルシステム。
Direct I/O	HP-UX 11.0	高度なバージョンの VxFS ファイルシステムまたは Online JFS。

スナップショットおよび Direct I/O の定義

Direct I/O を使用すると、クライアント エージェントで、高度なバージョンの VxFS、Online JFS (HP-UX)、および fssnap をインストールした Solaris の UFS 上のスナップショットを作成できます。クライアント エージェントは、ルート ボリュームに作成されている一時ディレクトリにマウントし、スナップショット バックアップを生成します。スナップショット バックアップの生成が完了した後、クライアント エージェントは一時ディレクトリをマウント解除し、スナップショットを削除します。

スナップショットバックアップを実行するには、スナップショットバッファを指定する必要があります。スナップショットバッファは、スナップされたボリュームで上書きされる前の、元のデータを保存するために使用するディスク領域です。スナップショットバッファを使用する場合は、以下の点に注意します。

- スナップショットバッファは、バックアップ処理中に容量が変化するスナップボリュームのすべてのデータを保存できる容量を持っている必要があります。スナップショットバッファの容量が不足すると、スナップショットが無効になり、バックアップに失敗します。
- スナップされたボリュームおよびスナップショットバッファが、同一のファイルシステム上に存在しないように注意してください。
- スナップされたボリュームおよびスナップショットバッファを別の物理ディスクに配置すると、パフォーマンスが向上します。
- Solaris プラットフォームの UFS (fssnap 使用) の場合、スナップショットバッファにはファイル名、ディレクトリ名、または raw パーティションを指定できません。

Direct I/O のバックアップまたはリストアでは、クライアント環境をチェックし、環境設定ファイル `caagperf.cfg` を編集する必要があります。`caagperf.cfg` ファイルに記述されたファイルシステム上のスナップショットおよび Direct I/O を表示するには、バックアップまたはリストアジョブをサブミットした後、コマンドラインで `mount` コマンドを実行します。

スナップショットで、`mount` コマンドを実行後に表示される出力は、マウントポイントが `SNAP_HOME_` というプレフィックスで始まる新規の読み取り専用ファイルシステムです。Direct I/O では、特定のファイルシステムのマウントオプションの変更を監視できます。`caagperf.cfg` ファイルのログフラグを有効にしている場合は、`caagperf.log` ファイルの詳細なメッセージを表示することもできます。

以下のセクションでは、これらの機能を使用できるように UNIX クライアントエージェントを環境設定する方法について説明します。

スナップショットおよび Direct I/O の設定

スナップショットおよび Direct I/O 機能を設定するには、以下の手順に従います。

1. `agent.cfg` ファイルに以下の行を追加して、環境変数 `CAAGPERF_ENABLE` を有効にします。

```
ENV CAAGPERF_ENABLE=1
```

注: `agent.cfg` ファイルは、`/opt/CA/ABcmagt` ディレクトリにあります。

この環境変数を有効にすると、`agent.cfg` ファイルのクライアントエージェントのセクションは、以下のようになります。

```
[0]
NAME      ABagentux
VERSION   nn.nn.nn
HOME      /opt/CA/uagent
ENV       LD_LIBRARY_PATH=/usr/local/CaLib:/opt/CA/ABcmagt
ENV       CAAGPERF_ENABLE=1
```

2. `/opt/CA/ABcmagt` ディレクトリに、`caagperf.cfg` という名前の設定ファイルを作成します。特定のファイルシステムで実行する操作の種類を、`caagperf.cfg` ファイルで指定する必要があります。

テーブル パラメータおよび値の設定

設定ファイルのフォーマットは、Windows の .inf ファイルと同じで、セクションおよびキーと値のペアから構成されます。セクション名は角かっこで囲まれた名前です。キーと値のペアは KEY=VALUE のフォーマットで、各行に 1 つのペアが記述されます。環境設定ファイル内のすべてのエントリは、大文字と小文字が区別されます。

キーと値のペアは、それらが属するボリュームの下にあり、セクション名がボリューム名になっています。caagperf.cfg ファイルのセクション名の構文の例としては、[/]または[/export/home]の 2 つがあります。ボリュームに複数のエントリがある場合、クライアント エージェントの動作は未定義です。

キーと値のペアを使用して、それらが属するボリュームのパラメータを設定します。デフォルトでは、すべてのオプションが無効になっています。ボリュームに特殊な処理が必要ない場合は、caagperf.cfg ファイルに記述する必要はありません。

以下の表で、キーと値について説明します。

キー	値
DOSNAP	ボリューム上でスナップショット機能を有効にします。値を BACKUP に設定します。これは、バックアップ処理中にスナップショットを取得する必要があることを示します。
SNAPSHOTBUFFER	スナップされたボリュームで上書きされる前の、元のデータを保存するために使用するバッファを指定します。値をファイル名またはパーティションに設定します。このファイルは、別のボリュームにあるファイルまたはディレクトリでもかまいません。 このフィールドの値は、ファイル システムタイプによって異なります。高度なバージョンの VxFS または Online JFS の場合、値は空のパーティションの名前となります。UFS の場合、値はファイル名、ディレクトリ名またはパーティション名となります。
DOUBIO	ボリューム上で Direct I/O 機能を有効にします。値は、BACKUP、RESTORE、および BACKUP_RESTORE です。このフィールドの値は、バックアップ要件またはリストア要件によって異なります。

UNIX システム用設定ファイル

UNIX システム設定ファイルのさまざまなバリエーションの例は次のとおりです。

例: fssnap がインストールされた UFS ファイルシステムを使用した Solaris 8 または Solaris 9 オペレーティングシステム

ファイルの 1 行目は、デバッグ フラグです。デバッグ エントリの下に 3 つのセクションは、ディスク上の /opt、/export/home、および / ボリュームに対応します。

/opt および /export/home セクションでは、バックアップ中のスナップショットを有効にし、/ セクションではバックアップおよびリストア処理で Direct I/O を有効にしています。

```
##DEBUG
[/opt]
DOSNAP=BACKUP
SNAPSHOTBUFFER=/garbage/snapbufferfile_1

[/export/home]
DOSNAP=BACKUP
SNAPSHOTBUFFER=/garbage/snapbufferfile_2

[/]
DOUBIO=BACKUP_RESTORE
```

例: 高度なバージョンの VxFS ファイルシステムをインストールした Solaris 8 オペレーティングシステム

ファイルには 3 つのセクションがあります。ファイルの 1 行目は、デバッグ フラグです。ファイルの 3 つのセクションは、/opt、/export/home、および / ボリュームです。/opt および /export/home セクションではバックアップ中のスナップショットを有効にし、/ ボリュームではバックアップおよびリストア処理で Direct I/O を有効にしています。

```
T##DEBUG
[/opt]
DOSNAP=BACKUP
SNAPSHOTBUFFER=/dev/dsk/c0t0d0s4

[/export/home]
DOSNAP=BACKUP
SNAPSHOTBUFFER=/dev/dsk/c0t0d0s4

[/]
DOUBIO=BACKUP_RESTORE
```

例: 高度なバージョンの VxFS ファイル システムまたは Online JFS ファイル システムをインストールした HP-UX オペレーティング システム

ファイルには 4 つのセクションがあります。ファイルの 1 行目は、デバッグ フラグです。ファイルのセクションは、/、/var、/usr、および/export ボリュームです。このファイルでは、/ ボリュームではバックアップおよびリストア処理中の Direct I/O を有効にし、他のボリュームではバックアップ中のスナップショットを有効にしています。

```
##DEBUG
[/]
DOUBIO=BACKUP_RESTORE

[/var]
DOSNAP=BACKUP
SNAPSHOTBUFFER=/dev/vg00/lvol7

[/usr]
DOSNAP=BACKUP
SNAPSHOTBUFFER=/dev/vg00/lvol7

[/export]
DOSNAP=BACKUP
SNAPSHOTBUFFER=/dev/vg00/lvol7
```

AS/400 Enterprise Option のトレース レベル

CA Technologies のテクニカル サポートの指示に基づいて、AS/400 Enterprise Option について記録されるアクティビティのレベルを変更することができます。トレースレベルはバックアップ パフォーマンスに影響する可能性があるため、CA Technologies のテクニカル サポートからの特別な指示がない限り、値を変更しないでください。

AS/400 Enterprise Option のすべてのトレースレベルを以下の表に示します。

レベル	詳細
ASO\$TRACE	クライアント エージェントのトレースの詳細を制御します。有効な値は、-1 と 0~0xFFFFFFFF です。ASO\$TRACE を -1 に設定すると、最も詳細な情報が記録されます。
ASO\$TRACE_AST	切り替え式のパラメータです。定義すると、Asynchronous System Trap (AST) がトレースされます。
ASO\$TRACE_IDENT	フォーマット パラメータです。推奨値は 0~5 です。デフォルトは 3 です。

ASO\$TRACE_DATA 各パケットに記録されるバイト数を制御します。範囲は無制限で、0 から始まります。デフォルトは 300 です。

UNIX および Linux のアクセス コントロール リスト

UNIX、Linux、および Mac OS X のクライアント エージェントの場合、ACL は Single User モードでのみサポートされています。このモードはパスワードなしモード (No Password Mode) と呼ばれます。UNIX、Linux、および Mac OS X のクライアント エージェント(または、データベース バックアップ エージェント)の場合、Common Agent の環境設定ファイル `agent.cfg` (`/opt/CA/ABcmagt` にあり)の対応するセクションに `NOPASSWORD` エントリを指定すると、Single User モードに設定できます。UNIX および Linux Agent の場合は、`uag.cfg` で `-S` オプションまたは `-NOPASSWORD` オプションを指定した場合も、Single User モードに設定できます。UNIX、Linux、および Mac OS X のクライアント エージェントでは、以下の 2 つの種類の ACL を使用できます。

例: ユーザの許可または拒否

アクセスコントロールリストで特定のユーザに対してバックアップまたはリストアを許可または拒否することができます。以下に `agent.cfg` ファイルの一部を例として示します。ACL を他のクライアント エージェントにも適用するには、それらのクライアント エージェント セクションを同様に変更する必要があります。

```
[0]
NAME ABagentux
VERSION nn.n.n
HOME /opt/CA/ABuagent
NOPASSWORD
CAUSER A:CAUSER1 N:CAUSER2
```

`NOPASSWORD` で Single User モードを有効にし、`CAUSER` で許可を付与または拒否するユーザを指定します (A は ALLOW、N は DENY を意味します)。`A:CAUSER1` と指定すると、`CAUSER1` はジョブを実行でき、`N:CAUSER2` と指定すると、`CAUSER2` に対してアクセスを拒否します。

注: Unix および Linux クライアント エージェントの場合、オブジェクトタイプは[0]です。Mac OS X クライアント エージェントの場合、オブジェクトタイプは[4]です。

例: IP アドレスによるシステムへのアクセス

アクセスコントロールリストにより、特定の IP アドレスでシステムにアクセスできるかどうかを判断できます。以下に `agent.cfg` ファイルの一部を例として示します。ACL を他のクライアントエージェントにも適用するには、ファイル内でそれらのエージェント セクションを同様に変更する必要があります。

```
[0]
NAME ABagentux
VERSION nn.n.n
HOME /opt/CA/ABuagent
NOPASSWORD
ALLOW N:172.16.0.0(255.255.255.0) H:172.31.255.255
DENY N:192.168.0.0(255.255.255.0) H:192.168.255.255
```

NOPASSWORD で Single User モードを有効にし、ALLOW および DENY を使用して、特定のネットワークや IP アドレスからシステムへのアクセスを許可するかどうかを指定します。N はネットワークアドレス、H はホストの IP アドレスを示します。

注: 任意でサブネット マスクを使用することもできます。サブネット マスクは括弧で囲みます。

UNIX および Linux クライアントエージェントでは特定のタイプの ACL を `uag.cfg` で指定できるほか、`-S`、`-NOPASSWORD`、`-CAUSER`、`-ALLOW`、および `-DENY` オプションを使用して指定することもできます。これらのオプションの詳細については、「設定可能なオプション」を参照してください。

両方の種類の ACL を同時に適用できます。いずれも場合も DENY が ALLOW よりも優先します。Single User モードでは、クライアントエージェントのすべての処理がシステム管理者 (root ユーザ) 権限で実行されます。`caagentd.log` には、Single User モード中に拒否されたユーザアドレス、IP アドレス、およびネットワークアドレスに関する情報が含まれています。

UNIX および Linux でのアクセスコントロール リストのバックアップおよびリストア

CA ARCserve Backup Client Agent for UNIX、CA ARCserve Backup Client Agent for Linux、および CA ARCserve Backup Client Agent for Mainframe Linux では、Linux クライアントエージェントを使用してバックアップした Linux システムにあるファイルおよびディレクトリのアクセスコントロールリスト (ACL) をバックアップおよびリストアします。Linux の拡張属性もバックアップされます。管理者は、ACL を使用して、ファイルおよびディレクトリへのアクセスを詳細に制御することができます。Linux クライアントエージェントでは、各ファイルおよび各ディレクトリの ACL の読み取りおよび設定を行うことができます。

ACL ライブラリの検証

必要な ACL ライブラリがインストールされているかどうかを確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
>rpm -qa |grep libacl
```

libacl-devel-* パッケージまたは libacl-* パッケージがリストされない場合は、これらをインストールする必要があります。

ACL ライブラリ パッケージのインストール

ACL ライブラリ パッケージをインストールする方法

1. 以下の ACL ライブラリ パッケージを Linux システムに CD イメージからコピーするかインターネットからダウンロードします。

- libacl パッケージ(libacl-2.2.3-1.rpm など)
- libacl-devel パッケージ(Libacl-devel-2.3.3-1.rpm など)

2. パッケージをインストールするには、以下のコマンドを実行します。

```
rpm -ivh <libacl-package-name>  
rpm -ivh <libacl-devel-package-name>
```

例:

```
>rpm -ivh libacl-2.3.3-1.rpm  
>rpm -ivh libacl-devel-2.3.3-1.rpm
```

これにより、libacl.so ライブラリが Linux システムにインストールされます。

Linux クライアントエージェントが 32 ビット Linux システムで実行されている場合は、これで ACL サポートが有効になります。Linux クライアントエージェントが 64 ビット Linux システムで実行されている場合は、libacl.so ライブラリが 32 ビットバージョンであることを確認してください。バージョンを確認し、必要に応じて 32 ビットライブラリへのリンクを作成します。

Linux ACL ライブラリ バージョンの検証

バージョンを確認するには、libacl.so のインストール ディレクトリに移動します。

Linux ACL ライブラリ バージョンの検証

1. 「Run ls 僕 /libacl.so」を実行して、libacl.so がリンクしているターゲットライブラリファイルを表示します。
2. ライブラリファイル名を使用して、libacl.so<linking-target-library> ファイルを実行します。

libacl.so が 32 ビットバージョンまたは 64 ビットバージョンのどちらをポイントしているかが示されます。

32 ビットの Linux ACL ライブラリへのリンクの作成

libacl.so が 64 ビットライブラリをポイントしている場合は、32 ビットライブラリから libacl.so へのリンクを作成する必要があります。以下に、64 ビット Mainframe Linux プラットフォームでリンクを作成する例を示します。

```
> cd /lib
> ln -sf libacl.so.1 libacl.so
```

使用している 64 ビット Linux システムに応じて、適切なリンクコマンドを実行してください。

AS/400 Enterprise Option の設定

AS/400 Enterprise Option の開始および停止の設定は、STRASO および ENDASO を使用して設定します。

開始設定

ライブラリレベル バックアップの設定を行って、AS/400 Enterprise Option を拡張することができます。

開始設定を行う方法

1. コマンドラインで以下を入力します。

```
straso
```
2. F4 キーを押します。
使用可能なオプションが表示されます。
3. 環境設定を入力し、Enter キーを押します。

注: Library Level Backup および Use QaneSava 用の環境設定は変更することができます。これらの環境設定によって、パフォーマンスが向上します。詳細については、「[実行環境設定 \(P. 64\)](#)」を参照してください。

実行環境設定

デフォルトでは、Use QaneSava および Library Level Backup の両方が *ON に設定されています。これらの設定によって、ライブラリレベル バックアップのエージェントのパフォーマンスが向上します。

Use QaneSava フラグを使用して、*ON および *OFF を切り替えます。Use QaneSava フラグを *ON に設定すると、バックアップが一時 SAVF ファイルを作成することなく実行されます。フラグを *OFF に設定すると、バックアップが実行され、一時 SAVF ファイルが作成されます。

Library level backup フラグを使用して、ライブラリのバックアップを制御します。Library level backup フラグを *ON に設定すると、SAVLIB コマンドがライブラリオブジェクトに適用されます。SAVLIB コマンドは、ライブラリ情報とライブラリ内の全ファイルの両方を 1 つのバックアップに保存するので、パフォーマンスが向上します。[Library Level Backup]機能は、複数のライブラリのバックアップ時に特に便利です。

フラグを ***OFF** に設定すると、SAVOBJ コマンドが使用され、ライブラリ内の各ファイルが個別にバックアップされます。ライブラリ全体のバックアップを行わない場合は、この方法を採用してください。

注: ライブラリレベルバックアップ機能では、増分および差分バックアップはサポートされていません。

停止設定

必要に応じて、AS/400 Enterprise Option の停止設定を行うことができます。

停止設定を行う方法

1. コマンドラインで以下を入力します。
 endaso
2. F4 キーを押します。
 環境設定画面にオプションが表示されます。
3. 環境設定を入力し、Enter キーを押します。

OpenVMS Enterprise Option の設定

OpenVMS Enterprise Option のインストール後、ポートアドレス以外に追加の設定を行う必要はありません。

ポートアドレスの設定

デフォルトの TCP ポートおよび UDP ポートのアドレスは両方とも 6050 です。TCP ポートは、プロセスとクライアント エージェント間の通信およびデータ転送に使用されます。CA ARCserve Backup では、UDP ポートを使用してホストをブラウズします。

TCP ポートまたは UDP ポートの設定を行う場合は、`bab$startup.com` ファイルに以下のコマンドを記述します。

```
DEFINE /SYSTEM ASO$PORT_NUMBER nnnn
```

この例では、`nnnn` はバックアップ マネージャのポート番号です。

重要: OpenVMS では、UDP ポートと TCP ポートの両方に同じポート番号を割り当てる必要があります。

TCP/IP スタックの最適化

TCP/IP スタックの設定は、クライアント エージェントのパフォーマンスに影響を与えます。通常、TCP Send および Receive クォータは 4096 に設定されます。これらの値を、OpenVMS システムにインストールしたスタックで許容可能な最大値に設定します。

OpenVMS Enterprise Option のトレース レベル

CA Technologies のテクニカル サポートの指示に基づいて、OpenVMS Enterprise Option について記録されるアクティビティのレベルを変更することができます。トレースレベルはバックアップ パフォーマンスに影響する可能性があるため、CA Technologies のテクニカル サポートからの特別な指示がない限り、値を変更しないでください。

レベル	詳細
ASO\$TRACE	クライアント エージェントのトレースの詳細を制御します。有効な値は、-1 と 0~0xFFFFFFFF です。ASO\$TRACE を -1 に設定すると、最も詳細な情報が記録されます。
ASO\$TRACE_AST	切り替え式のパラメータです。定義すると、Asynchronous System Trap (AST) がトレースされます。

ASO\$TRACE_IDENT	フォーマットパラメータです。推奨値は0～5です。デフォルトは3です。
ASO\$TRACE_DATA	これは、ログに記録される各パケットのバイト数を制御します。範囲は無制限で、0から始まります。デフォルトは300です。

第 4 章: クライアント エージェントの使用法

この章では、クライアント エージェントを停止および開始する方法、通常のバックアップ環境でクライアント エージェントのバックアップ ジョブおよびリストア ジョブを開始する方法の詳細について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[Runtime Statistics](#) (P. 69)

[アクティビティログ](#) (P. 70)

[Windows ネットワーク サーバのデータのバックアップ](#) (P. 73)

[Client Agent の開始と停止の手順](#) (P. 73)

Runtime Statistics

Windows 用のクライアント エージェント ランタイム コンポーネントでは、リアルタイムの統計情報が提供され、バックアップ ジョブおよびリストア ジョブの処理の進捗状況が表示されます。

注: Runtime Statistics は、Windows でのみ表示可能です。

Client Agent for Windows の Runtime Statistics の表示

CA ARCserve Backup では、Client Agent for Windows を実行中のコンピュータに関する Runtime Statistics を表示できます。

Client Agent for Windows の Runtime Statistics を表示する方法

1. Windows の [スタート]-[すべてのプログラム]-[CA]-[ARCserve Backup]-[Backup Agent 管理]の順に選択します。

[Backup Agent 管理]が開きます。

2. [接続]を選択します。

CA ARCserve Backup によって、処理された最後の 32 個のジョブが表示されます。

ジョブがアクティブの場合、そのジョブをクリックすると現在の Runtime Statistics を表示できます。ジョブが完了している場合は、そのジョブの完了した統計が表示されます。

注: 統計はメモリ内に保存されます。そのため、ユーザが Backup Agent 管理および Universal Agent サービスを閉じると、接続の統計が失われます。ただし、アクティビティ ログから引き続きジョブの結果を参照できます。

アクティビティ ログ

サーバ ベースの CA ARCserve Backup システムでは、アクティビティ ログが生成されます。アクティビティ ログには、クライアントエージェントが処理するすべてのジョブに関する情報が表示されます。以下のセクションでは、サーバ サイドおよびクライアント サイドのアクティビティ ログを各クライアント エージェントで表示する方法について説明します。

Windows Server でのアクティビティ ログの表示

Windows の CA ARCserve Backup サーバでアクティビティ ログを表示する方法

1. CA ARCserve Backup マネージャ コンソールの [クイック スタート] メニューから [ジョブ ステータス] を選択します。

ジョブ ステータス マネージャが表示されます。

2. [アクティビティ ログ] タブをクリックして、ログのリストを表示します。

3. [ジョブ ステータス]メニューから、[アクティビティ ログ]-[印刷プレビュー]を選択します。

クライアント エージェント アクティビティ ログ ファイルの印刷プレビュー出力が表示されます。

UNIX、Linux、または Mac OS X クライアント エージェント マシンでのアクティビティ ログの表示

UNIX または Linux クライアント エージェントが開始されると、ただちに `uag.log` というアクティビティ ログ ファイルが作成され、ログ ディレクトリに保存されます。ログ ファイルのディレクトリは、クライアント エージェントのホーム ディレクトリ(デフォルトのパスは `¥¥BABuagent`) 以下の `log` ディレクトリにあります。

`uag.log` ファイルは、マシンのバックアップ ジョブおよびリストア ジョブの実行中に発生するすべてのアクティビティおよびエラーを記録します。ログ画面では、各ジョブは番号順に並べられ、日付および時刻でも識別できます。

クライアント エージェント マシン上で、`print filename` コマンドを使用して、これらのログの内容を表示できます。

注: Common Agent に関連するログ メッセージは、すべて `/opt/CA/ABcmagt/logs/caagentd.log` ファイルに保存されます。

AS/400 Enterprise Option を実行しているコンピュータのアクティビティ ログ

Enterprise Option for AS/400 では、CA ARCserve Backup ライブラリ内にログ ファイルが作成されます。以下の 2 つのファイル メンバがあります。

- **AGENT.MBR:** エージェントの処理に関連するアクティビティおよびエラーが記録されます。
- **ASBR.MBR:** CA ARCserve Backup のブラウザ アクティビティの情報が記録されます。

OpenVMS Enterprise Option を実行しているコンピュータのアクティビティ ログ

サーバでエージェントの実行が開始されると、CA ARCserve Backup はただちにアクティビティログ ファイル `aso$agent_<nodename>.log` を生成し、ログ ディレクトリに保存します。ジョブ番号、日付、および時刻で識別される新規のログ ファイルは、各ジョブおよびそれに続くエージェントの各実行に対して作成されます。各ログ ファイルの内容は、エージェントで有効になっているトレースレベルによって決まります。

Client Agent ログ ファイルの削除

UNIX および Linux のクライアント エージェントでは、マシン上で通常のファイルを削除するのと同じ方法で、ログ ファイルをクライアント マシンから削除できます。たとえば、以下のコマンドを実行します。

```
$>rm uag.log
```

Windows クライアント エージェントの場合、[Backup Agent 管理]を使用してログ ファイルを削除します。[オプション]メニューの[Client Agent ログ ファイルの削除]を選択します。削除するログ ファイルを選択し、[削除]をクリックします。

Windows ネットワーク サーバのデータのバックアップ

Windows サーバにクライアント エージェントをインストールした場合、クライアント エージェントを介してそのサーバのデータをバックアップすることができます。

Windows ネットワーク サーバのデータをバックアップする方法

1. バックアップ マネージャを開きます。
2. [ソース]タブをクリックします。
3. [ネットワーク]オブジェクトを展開してから[Windows システム]ネットワーク オブジェクトを展開し、クライアント マシンを特定します。
4. クライアント マシンを右クリックします。ポップアップ メニューから[エージェントの使用]を選択します。
5. [エージェントの使用]チェックボックスをオンにします。
6. プロトコルを選択します。[IP アドレス]にクライアント コンピュータのアドレスを入力するか、[コンピュータの名前解決]を選択してクライアント エージェントで IP アドレスを決定するように指定します。
7. [OK]をクリックします。
これで、クライアント エージェントが選択されました。
8. セキュリティ情報を要求されたら、対象サーバの認証情報を入力します。

Client Agent の開始と停止の手順

以下のセクションでは、各種のクライアント エージェントを開始および停止する手順について説明します。

注: バックアップまたはリストア ジョブの処理中にクライアント エージェントが停止すると、ジョブが失敗します。その場合は、ジョブの処理を最初からやり直す必要があります。

Windows の開始と停止の要件

Windows クライアント エージェントでは、**Universal Agent** という共通コンポーネントを使用します。

Universal Agent は インストール中にインストールまたは自動更新されます。

Universal Agent は、自動的に開始するサービスとしてシステムに登録され、デフォルトではローカルのシステム アカウントで実行されます。**サービスが開始すると、Windows クライアント エージェントがロードされます。Windows クライアント エージェントは、ユーザがシステムにログオンしていなくても使用できます。**

Backup Agent 管理を使用して、Windows クライアント エージェントを開始または停止してください。**[Backup Agent 管理]**は、クライアント エージェントの活動を監視し、**Universal Agent** サービスが停止した場合の予期せぬジョブの障害を防止します。

Windows Client Agent の開始と停止

Windows Client Agent の開始/停止方法

1. **[Backup Agent 管理]**ウィンドウを開きます。
2. **[オプション]**メニューから**[サービス]**を選択します。
3. (オプション)コンピュータの起動時にクライアント エージェントを自動的に開始しないようにするには、**[システムの起動時に Backup Agent サービスを開始する]**オプションをオフにします。
4. サービスを開始するには青い矢印が描かれているボタン、停止するには赤い四角形が描かれているボタンをそれぞれクリックします。

注: サービスを停止すると、**Universal Agent** を使用する他のコンポーネントに影響します。

5. **Backup Agent サービス マネージャ**を閉じます。

UNIX および Linux クライアント エージェントの開始と停止

クライアント エージェントを開始する前に、クライアント エージェントの環境設定が完了していることを確認します。クライアント エージェントの環境設定を行っていない場合、以下のスクリプトを実行します。

```
#abuagent/uagentsetup
```

上記の例では、**abuagent** はエージェントのホーム ディレクトリのフルパスを表しています。デフォルトのパスは **/opt/CA/ABuagent** です。

UNIX および Linux クライアント エージェントの開始

UNIX または Linux クライアント エージェントをインストールすると、クライアント エージェントは自動的に開始されます。

エージェントのステータスをチェックするには、コマンドラインで以下のコマンドを入力します。

```
# uagent status
```

エージェントを開始するには、コマンドラインで以下のコマンドを入力します。

```
# uagent start
```

エージェントが有効ではない場合は、環境設定スクリプトの **uagentsetup** を実行します。

UNIX および Linux クライアント エージェントの停止

UNIX、Linux、Mac OS X のクライアント エージェントを停止するには、**root** としてログインし、コマンドラインで以下のコマンドを入力します。

```
# uagent stop
```

Common Agent の開始と停止のステータス

クライアント エージェントを開始または停止すると、UNIX または Linux システムのスクリプトによって **agent.cfg** ファイルが変更され、クライアント エージェント エントリが有効または無効とマークされます。また、このスクリプトは変更内容について **BrightStor ARCserve Backup Universal Agent** に通知します。Common Agent は、環境設定ファイル内でまだ有効となっているエントリの数に応じて、実行し続けるかどうかを決定します。

たとえば、Linux クライアントに `uagent stop` を発行すると、`ABagntux` セクションが無効となります。`ABagntux` セクションがファイル内の唯一のセクションである場合（つまり、インストールされている `CA ARCserve Backup` クライアント エージェントが 1 つのみの場合）、`Common Agent` は停止します。その後、`agent.cfg` ファイルの `ABagntux` セクションを有効にするために、`uagent start` を発行する必要があります。

`uagent start` コマンドを入力すると、`Common Agent` のステータスが無効から有効に変更されます。特定のクライアント エージェントが開始または停止すると、スクリプトはそれに応じて `agent.cfg` ファイルを修正し、`Common Agent` に通知します。その時点で、`Common Agent` は、環境設定ファイル内でまだ有効となっているセクションの数に応じて、実行し続けるかどうかを決定します。

UNIX および Linux クライアント エージェントのステータスの確認

UNIX および Linux クライアント エージェントのステータスを確認するには、`root` としてログインし、コマンドラインで以下のコマンドを入力します。

```
# uagent status
```

このコマンドがエラーになる場合は、クライアント エージェントの環境設定が必要な場合があります。クライアント エージェントを環境設定するには、以下のスクリプトを実行します。

```
#abuagent/uagentsetup
```

上記の例では、`abuagent` はエージェントのホーム ディレクトリのフル パスを表しています。デフォルトのパスは `/opt/CA/ABuagent` です。

Enterprise Option for AS/400 の開始と停止の要件

クライアント エージェントを開始または停止するには、`*JOBCTL` (ジョブ コントロール) 権限が必要です。

Enterprise Option for AS/400 のクライアント エージェントの開始

エージェントを開始するには、`AS/400` にログオンし、コマンドラインで以下のコマンドを使用します。

```
straso
```

Enterprise Option for AS/400 のクライアント エージェントの停止

エージェントを停止するには、AS/400 にログオンし、コマンドラインで以下のコマンドを使用します。

```
endaso
```

Enterprise Option for OpenVMS の開始と停止の要件

クライアントエージェントが置かれている OpenVMS マシンを操作できる適切なネットワーク認証情報があることを確認してください。

Enterprise Option for OpenVMS のクライアント エージェントの開始

エージェントを起動するには、システムとしてログインし、コマンドラインで以下のコマンドを実行します。

```
@sys$startup: bab$startup.com
```

Enterprise Option for OpenVMS のクライアント エージェントの停止

エージェントを停止するには、システムとしてログインし、コマンドラインで以下のコマンドを実行します。

```
@sys$startup: bab$shutdown.com
```

Enterprise Option for OpenVMS のクライアント エージェントのステータスの確認

クライアントエージェントのステータスを確認するには、ログインし、コマンドラインで以下のコマンドを実行します。

```
show sys /proc=aso$*
```


用語集

アクセスコントロールリスト

アクセスコントロールリスト(ACL)はアクセス制御エントリ(ACE)のリストです。ACL内の各ACEはトラスティを示し、そのトラスティに対して許可、拒否、または監査するアクセス権限を指定します。

アクティビティログ

アクティビティログは、クライアント エージェントが処理するすべてのジョブに関する情報を表示するログ ファイルです。

クライアント エージェント

クライアント エージェントは、ネットワーク コンピュータ上にインストールする独立したソフトウェア パッケージで、コンピュータと CA ARCserve Backup 間のネットワーク インターフェースを提供します。クライアント エージェントは、高い接続性を実現するだけでなく、ネットワーク上のバックアップ サーバとデータ ストレージ タスクを共有する機能を提供します。

索引

3

32 ビットのライブラリから libacl へのリンクの作成
- 63

A

ABuagent/uagentsetup コマンド - 75

ACL ライブラリ

32-ビット Linux - 62

Linux libacl.so - 62

パッケージ - 62

要件 - 62

agent.cfg

クライアント エージェント環境設定ファイル -
48

AS/400

endaso コマンド - 65

straso コマンド - 76

環境設定 - 63

ジョブ コントロール権限 - 76

ライブラリ レベルのバックアップ機能 - 64

AS/400 のジョブ コントロール権限 - 76

B

bab\$shutdown.com OpenVMS コマンド - 77

bab\$startup.com OpenVMS コマンド - 77

C

caagent

start コマンド - 49

stop コマンド - 49

update コマンド - 49

caagentd

Common Agent のバイナリ - 44

Common Agen のログ ファイル - 71

caagperf.cfg 環境設定ファイル - 54, 56

caagperf.log ファイル - 54

cabr.cfg ブラウザの環境設定ファイル - 43

CAPortConfig.cfg

環境設定ファイル - 48

例 - 34

Common Agent

agent.cfg - 44

caagentd バイナリ - 44

環境設定ファイル - 44

自動インストール - 19

接続 - 50

ディレクトリ - 44

ポート番号 - 49

ホストと信頼関係にあるユーザのアクセス -
50

ユーザの開始と停止のスクリプト - 49

cprocess - 48

D

Direct I/O

UNIX サポート - 54

概要 - 54

E

endaso AS/400 コマンド - 77

F

fs.cntl ファイル システム コントロール ファイル -
43

fssnap - 54

I

IP アドレス

UNIX および Linux の ACL - 60

L

libacl.so ACL ライブラリ - 62

Linux

32-ビット ACL ライブラリ - 62

32 ビットの ACL ライブラリへのリンク - 63

ACL ライブラリ バージョンの検証 - 63

O

OpenVMS

- bab\$shutdown.com コマンド - 77
- bab\$startup.com コマンド - 77
- show sys /proc=aso\$* コマンド - 77
- TCP/IP スタックの最適化 - 66
- 環境設定 - 65

P

port.cfg

- Common Agent - 49
- UNIX と Linux の環境設定ファイルについて - 48

PortsConfig.cfg 設定ファイル - 34

print filename コマンド - 71

R

Runtime Statistics - 69

S

show sys /proc=aso\$* OpenVMS コマンド - 77

single user モード - 60

straso AS/400 コマンド - 76

U

uag.cfg - 42

uag.cntl ディレクトリコントロール ファイル - 43

uag.log アクティビティログ ファイル - 71

uagentsetup スクリプト - 75

uagent コマンド - 75

UDP ポート、Common Agent - 49

W

Windows

- IP アドレス - 34
- ウイルススキャンの実行 - 40
- サポートの共有 - 26
- システム状態のリストア - 26
- システムハイブのリストア - 26
- パスワードセキュリティ - 28
- バックアップ エージェント管理 - 28

プロセスの優先度 - 28

ポート番号 - 34

Windows のマネージャ インターフェース - 23

あ

アクセスコントロールリスト(ACL)

UNIX および Linux - 60

アクティビティログ

AS/400 のトレースレベル - 59

概要 - 70

サンプル - 70

表示 - 70

インストール

ACL ライブラリ - 62

Client Agent for Windows - 19

インストールに関する考慮事項

OpenVMS - 18

Windows - 17

ウイルススキャン - 40

エージェントステータスの確認

OpenVMS - 77

UNIX および Linux - 75

か

環境設定

AS/400 - 63

OpenVMS - 65

UNIX および Linux クライアント エージェント の環境設定 - 42

Windows クライアント エージェント - 25

Windows セキュリティオプション - 32

Windows ネットワーク通信 - 34

スナップショットおよび Direct I/O - 56

環境設定ファイル

agent.cfg - 48

caagperf.cfg - 54, 57

CAPortConfig.cfg - 34, 48

port.cfg - 48

PortsConfig.cfg - 34

Solaris サンプル - 58

環境変数 (ENV) - 45

クライアント エージェントの開始 - 73

クライアントエージェントの追加

Windows サーバの手動操作 - 23

クライアントエージェントの追加とオート ディス
カバリ - 21

クライアントエージェントの停止 - 73

コマンド

\$>rm uag.log - 72

ABuagent/uagentsetup - 75

bab\$shutdown.com OpenVMS - 77

bab\$startup.com OpenVMS - 77

caagent - 49

endaso AS/400 - 77

straso AS/400 - 76

uagent status - 75

マウント - 54

ログを表示するファイル名をプリント - 71

コンピュータの名前解決

プロトコルの選択 - 73

さ

ジョブ パッケージ - 41

スクリプト

agent.cfg ファイルを変更するための使用 -
75

uagentsetup - 75

スナップショット

UNIX サポート - 54

概要 - 54

機能 - 54

出力 - 54

バッファ - 54

制御ファイル - 43

た

ディレクトリ コントロール ファイル - 43

トレースレベル

AS/400 - 59

OpenVMS - 66

な

ネットワーク インターフェース カード (NIC)

IP アドレス - 34

は

パスワード、Windows - 37

バックアップ エージェント管理 - 28

ファイル システム コントロール ファイル - 43

ブラウザ環境設定ファイル - 43

プロトコル - 23

ポートアドレスの環境設定 - 48

ポート番号、Common Agent - 49

ホーム ディレクトリ - 47

ホストと信頼関係にあるユーザのアクセス - 50

や

ユーザ アクセス、Common Agent - 50

ら

ライブラリレベルのバックアップ機能 - 64

ログ ファイル

caagperf.log - 54

アクティビティ - 70

削除 - 72